

寺 田 遺 跡 IV

—府営和泉寺田住宅建て替えに伴う発掘調査—

大阪府埋蔵文化財調査報告2014-1

平成26年11月

大阪府教育委員会

寺 田 遺 跡 IV

—府営和泉寺田住宅建て替えに伴う発掘調査—

平成26年11月

大阪府教育委員会

序 文

寺田遺跡は大阪府南西部、和泉市寺田町に位置する遺跡です。平成14年度に、府営和泉寺田住宅の建て替え事業に先立って試掘調査をおこなったところ、古墳時代から中世の遺構や遺物が出土したため、府営住宅敷地内を寺田遺跡として新たに周知させることとなりました。これ以降、住棟などの建て替え工事に伴って、平成16年度、19・20年度、22年度と3次にわたり発掘調査を実施してきました。

平成25年度には、遺跡の西部にあたる道路拡張予定地において、第4次調査をおこないました。ここからは、弥生時代後期後半から古墳時代前期に、東から西へ向かって流れていたとみられる自然流路を確認しました。流路からは、手焙形土器という祭祀に用いたと考えられる土器がほぼ完全な形で出土しました。また、調査区北東部で検出した土坑には、古墳時代初頭の甕や小型丸底壺などの古式土師器がまとまって埋まっていました。

今回を含む4次の発掘調査によって、寺田遺跡においては、弥生時代中期から古墳時代後期にかけて、居住域を移動させながら集落を営んでおり、その中で、古墳時代中期に最盛期を迎えたことが明らかになりました。

最後に、発掘調査の実施にご協力いただきました関係各位ならびに地元の皆様に深く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政へのご理解とご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

平成26年11月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長 荒井 大作

例　　言

1. 本書は、府営和泉寺田住宅建て替え工事に伴い実施した和泉市寺田町所在、寺田遺跡（調査番号13018）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、大阪府住宅まちづくり部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。
3. 現地調査は、平成25年度に、調査第二グループ副主査 林 日佐子を担当者として実施した。
また、整理作業は平成25・26年度に、調査管理グループ主査 三宅正浩（平成25年度）、同小浜 成（平成26年度）、副主査 藤田道子を担当者として実施した。
4. 本調査の写真測量は、株式会社エムズに委託した。撮影フィルムは、同社において保管している。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は、林がおこない、遺物写真は有限会社阿南写真工房に委託した。
6. 出土遺物と記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
7. 本書の執筆および編集は、林がおこなった。
8. 発掘調査、遺物整理、本書作成に要した経費は、大阪府住宅まちづくり部が負担した。
9. 発掘調査にあたっては、府営和泉寺田住宅および周辺住民の方々に、多くのご協力をたまわった。
記して感謝いたします。
10. 本書は300部作成し、一部あたりの単価は560円である。

凡　　例

1. 本書で用いた座標値は、世界測地系に基づく。挿図中の方位は座標北を示す。水準値は、T.P.値（東京湾平均海面値）を用いている。
2. 本書で用いた地層の土色ならびに土器の色調については、『新版 標準土色帖（2003年版）』（小山正忠・竹原秀雄編・著 農林水産省農林水産技術会議事務局監修）による。

目 次

原色図版

序文

例言

凡例

目次

挿図目次

図版目次

第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過と方法	1

第2章 位置と環境

第1節 地理・歴史的環境	3
第2節 既往の調査	5

第3章 調査成果

第1節 層序	6
第2節 遺構と遺物	9

第4章 総括

第1節 第4次調査	19
第2節 寺田遺跡の変遷	20

図版

報告書抄録

挿図目次

図1 地区割図	2
図2 寺田遺跡と周辺の遺跡	4
図3 今回の調査区と既往の調査	5
図4 調査区西壁・北壁・南壁 土層断面図	7・8
図5 第1遺構面 検出遺構 平面図	10
図6 第1遺構面(北半部) 検出遺構 平面図・断面図	11
図7 出土遺物実測図(1)	12
図8 第2遺構面 検出遺構 平面図	13
図9 037土坑 土器出土状況 平面図・断面図	15
図10 037土坑 平面図・断面図	15
図11 032柱穴、030・031・033・035・036ピット 平面図・断面図	16
図12 手焙形土器 出土状況 平面図・断面図	17
図13 出土遺物実測図(2)	18
図14 寺田遺跡 検出遺構(弥生時代後期後半～古墳時代前期)	20
図15 寺田遺跡 検出遺構(古墳時代中期～後期)	22

図版目次

原色図版 出土遺物

- a 034流路 出土遺物
- b 037土坑 出土遺物

図版1 土層断面

- a 西壁北東部 土層断面（南東から）
- b 西壁中央部 土層断面（東から）
- c 北壁南東部 土層断面（南から）

図版2 第1遺構面 検出遺構（1）

- a B区 検出遺構（西上方から）
- b A・B区 検出遺構（西上方から）
- c A区北東部 検出遺構（南東上方から）
- d A区中央部 検出遺構（南東上方から）

図版3 第1遺構面 検出遺構（2）

- a A区中央部・南西部 検出遺構（東上方から）
- b A区南西部 検出遺構（南東上方から）
- c C区 検出遺構（北東上方から）

図版4 第2遺構面 検出遺構

- a A区 検出遺構（南上方から）
- b A区北東部 検出遺構（南東上方から）
- c C区 検出遺構（南東上方から）

図版5 第2遺構面 遺構（1）

- a 034流路 北東部 断面（南東から）
- b 034流路 中央部 断面（南東から）
- c 034流路 中央部 断面（南東から）
- d 032柱穴 断面（北西から）
- e 036ピット 断面（北西から）

図版6 第2遺構面 遺構（2）

- a 034流路 手焙形土器出土状況（南東から）
- b 034流路 手焙形土器出土状況（東から）
- c 034流路 手焙形土器出土状況（北東から）

図版7 第2遺構面 遺構（3）

- a 037土坑 土器出土状況（北西から）
- b 037土坑 土器出土状況（南西から）
- c 037土坑 土器出土状況（北西から）

図版8 出土遺物（1）

- a 001溝（1）・第3層（2～6・14～16）出土遺物
- b 第3層 出土遺物

図版9 出土遺物（2）

- a 034流路 出土遺物
- b 037土坑 出土遺物

図版10 出土遺物（3）

034流路（17）・037土坑（18・19・21～23）・第5層（32）出土遺物

図版11 出土遺物（4）

- a 037土坑 出土遺物
- b 第4層（29～31）・第5層（27・28・③）出土遺物

第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

和泉市寺田町所在の府営和泉寺田住宅において、住宅環境の改善と土地の有効利用のため、木造平屋建ての住宅を中・高層住宅に建て替える計画がたてられた。それに先立ち、大阪府教育委員会は、埋蔵文化財の遺存状況を確認するため、平成14年9月に試掘調査を実施した。その結果、古墳時代から中世にかけての遺構や遺物が検出されたため、和泉市教育委員会と協議をおこない、住宅敷地内を寺田遺跡と名付けて、新たに埋蔵文化財包蔵地として周知させることとなった。

その後、第1～3期の住棟等の建て替え事業に先立ち、建設予定地において、第1次（平成16年度）、第2次（平成19・20年度）、第3次（平成22年度）と3次にわたり発掘調査を実施してきた。

平成25年度には、住宅まちづくり部の依頼を受け、住宅敷地内西側の道路拡張予定地において、発掘調査をおこなった。今回の調査をもって、当府営住宅の建て替え事業に伴う発掘調査は終了する。

第2節 調査の経過と方法

（1）調査の経過

発掘調査は平成25年7月1日から8月28日までおこない、埋戻しを含めた現地作業は9月18日に終了した。調査区は、北西側の道路に沿って、長さ68mにわたる北東－南西方向の細長い調査区をA区、A区の北東端から直角に南東に延びる調査区をB区、A区の南西端から同じく直角に南東に延びる調査区をC区とした。調査面積は301m²である。

第1～3次の調査成果、ならびに今回の調査区の遺物包含状況を観察しながら、現地表面以下、第3～3層の高さを目途に重機で掘削し、それより下層については人力で掘削した。順次、堆積土層ごとの掘削と遺構面の精査をおこない、必要に応じて、実測図作成と写真撮影を実施した。

古代から中世にあたる第1遺構面については、検出遺構の全体平面図等の実測図は平板等を用いて作成した。弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にあたる第2遺構面については、測量を委託し、トラッククレーンを用いた空中写真測量と図化を実施した。

8月24日には、府営住宅や地元住民ならびに府民の方々を対象に、発掘調査の状況と成果を公開した。雨天にも関わらず、小・中学生をはじめとする計66人の参加を得た。

現地調査終了の後、平成26年度にかけて、出土遺物・図面・写真等の整理作業を実施した。



現地公開風景

(2) 調査の方法

地区割りについては、大阪府発行の1万分の1の地形図を基に、4段階の区分を用いている。第Ⅰ区画は南西隅を基準に、縦軸をA～O、横軸を0～8に区画する。寺田遺跡は和泉市の西北にあたり、D4区内に位置している。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準に、16等分したもので、縦1500m、横2000mの範囲となり、今回の調査区は14区にあたる。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100m方眼で区画し、北東隅を基準として、縦軸をA～O、横軸を1～20に区分したもので、今回の調査区は30区内にあたる。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を10m方眼で区画し、北東部を基準として、縦軸をa～j、横軸を1～10に区分したものである。今回の調査区の北端はD4-14-30-4e、南端はD4-14-30-8jに相当する(図1)。この地区割に基づいて、実測図作成ならびに遺物の取り上げ等の現地調査を実施した。

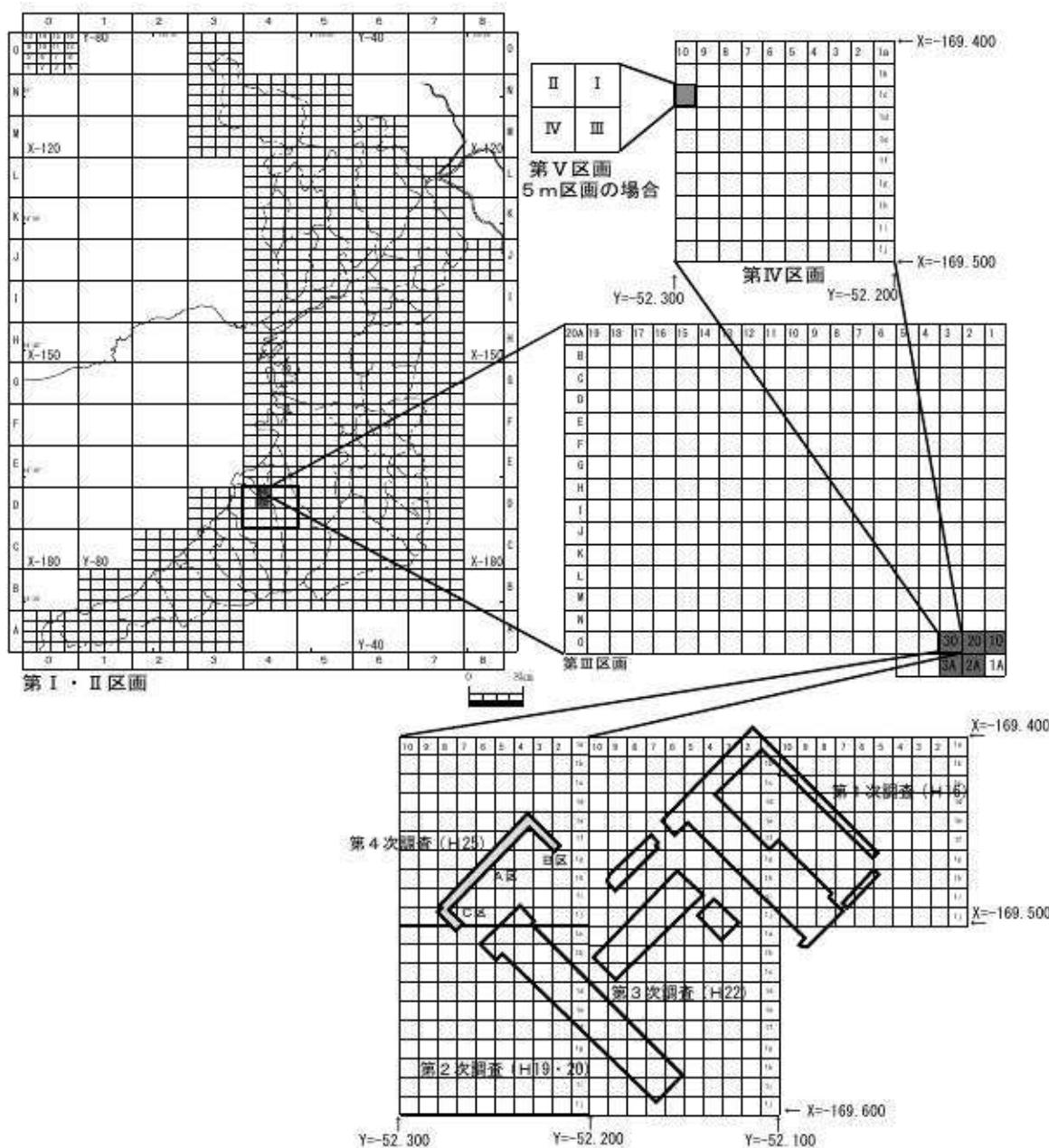


図1 地区割図

第2章 位置と環境

第1節 地理・歴史的環境

寺田遺跡の所在する和泉市は、大阪府の南西部に位置する。和泉市は南東から北西に細く長い形状を呈しており、西側は大阪湾に面している。この和泉市の北西部に寺田町が広がる。地形としては、松尾川によって形成された低位段丘上に立地し、遺跡は東から西に向かって、ゆるやかな傾斜がみとめられる。標高は27~28mである。

寺田遺跡の周辺の歴史的環境については、主に、第1~4次調査で確認した主要な遺構・遺物の時代を概観する。弥生時代においては、大津川下流域の右岸に位置する池浦遺跡で、弥生時代前期中葉の溝がみられる。前期後葉には、和泉市・泉大津市域の池上曾根遺跡で竪穴住居や方形周溝墓が出現する。

弥生時代中期になると、池上曾根遺跡の集落がしだいに拡大し、中期後葉には最大規模となり、この一帯の拠点集落なる。同時期には、府中遺跡、池田下遺跡、万町北遺跡で竪穴住居や方形周溝墓が形成されるようになり、集落の数は増加していく。寺田遺跡の北西にあたる和泉市の和氣遺跡でも、集落が営まれ始める。

弥生時代後期になると、池上曾根遺跡では居住域が縮小していく。その他の遺跡でも縮小傾向が進むなか、府中遺跡では、竪穴住居や方形周溝墓群の存在が顕著となる。また、寺田遺跡東方の丘陵上には高地性集落である觀音寺山遺跡が出現し、多数の竪穴住居からなる大規模な集落が営まれる。庄内式併行期には、寺田遺跡において集落が顕著になるように、周辺の府中遺跡、豊中遺跡、七ノ坪遺跡、和氣遺跡、上町遺跡でも竪穴住居がみられる。

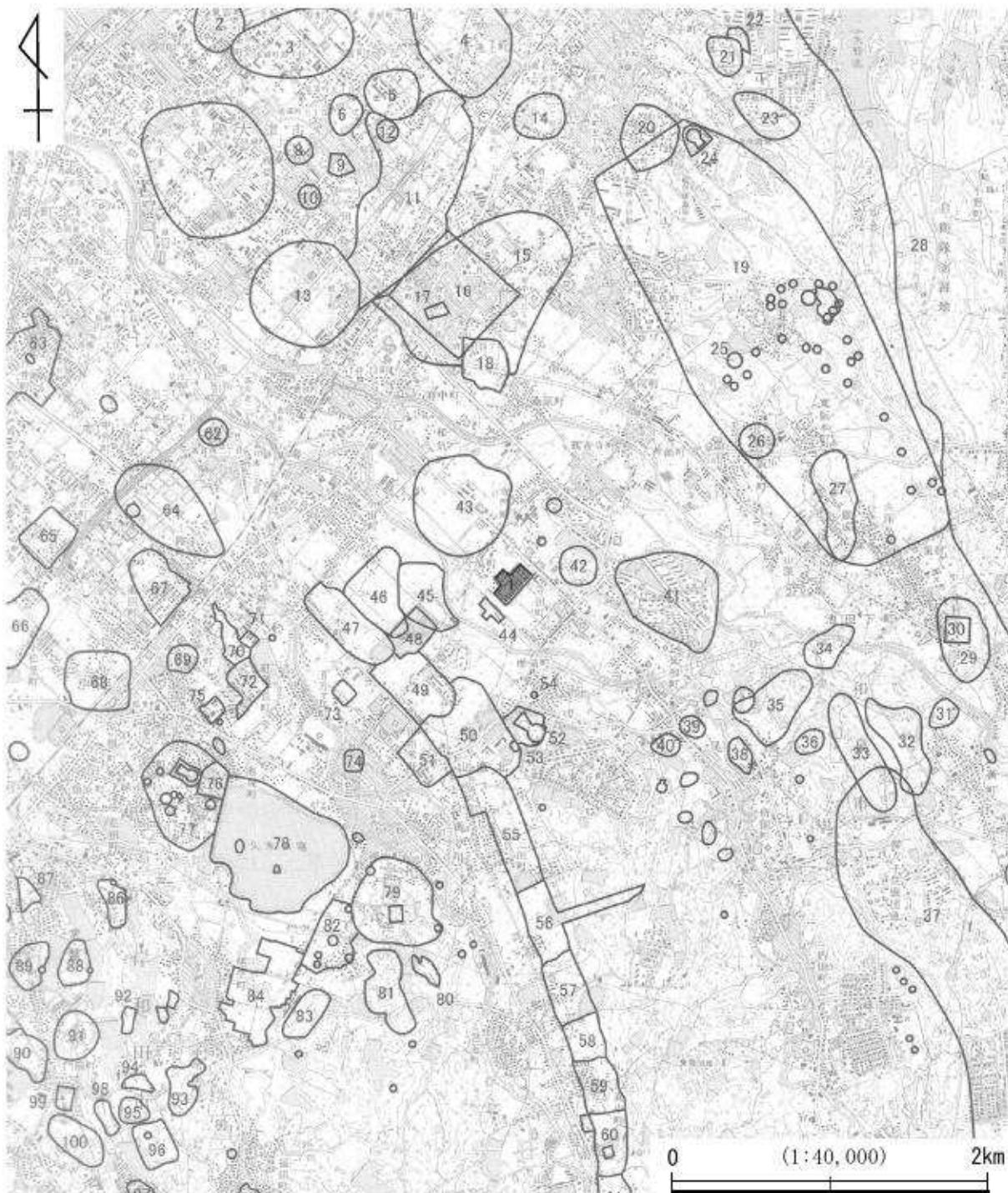
古墳時代前期になると、寺田遺跡では竪穴住居や掘立柱建物などで構成される集落が庄内式併行期から継続するのと同様に、七ノ坪遺跡、府中遺跡、和氣遺跡、豊中遺跡、田治米宮内遺跡でも確認されている。古墳については、古墳時代前期後半には、信太山丘陵に和泉黄金塚古墳が出現する。さらに、古墳時代前期末頃には、松尾川の対岸およそ1km、岸和田市域の摩湯山古墳が築造される。

次いで、古墳時代中期には寺田遺跡の集落が最大規模となり、最盛期を迎えることになる。同じく、府中遺跡、和氣遺跡、小田遺跡、田治米宮内遺跡、西大路遺跡でも集落が継続していく。古墳としては、中期後半には、貝吹山古墳、風吹山古墳が築造される。

古墳時代後期には、寺田遺跡で集落が継続していくとともに、二保池北遺跡、三田遺跡、上フジ遺跡、万町北遺跡などの集落も出現する。また、この時期には群集墳が多く築造されるようになる。

古代においては、寺田遺跡の北方2kmの地点に和泉国府が設置され、和泉国の中心的な役割を担っていたといえる。一方、寺田遺跡の北の横尾川流域には、安楽寺・池田寺・坂本寺・和泉寺などの古代寺院が次々に建立されていく。

中世には、和氣遺跡、水込遺跡、山直中遺跡、二保池北遺跡で古代以来営まれてきた集落が継続していく。その他には、池田寺遺跡、万町遺跡において、新たに集落が営まれる。寺田遺跡と同様に、和氣遺跡において、条里地割に基づく水田耕作がおこなわれた痕跡を見出すことができる（図2）。



- 1 寺田遺跡 2 東雲遺跡 3 池浦遺跡 4 池上曾根遺跡 5 七ノ坪遺跡 6 穴師遺跡 7 虫取遺跡 8 穴師小学校校庭遺跡
 9 莉田城跡 10 穴田遺跡 11 豊中遺跡 12 大福寺跡 13 板原遺跡 14 伯太北遺跡 15 府中遺跡 16 和泉国府跡 17 国府城
 跡 18 和泉寺跡 19 信太千塚古墳群 20 伯太藩陣屋跡 21 聖神社遺跡 22 信太の森の鏡池 23 惣ヶ池遺跡 24 丸笠山古墳
 25 信太千塚62号墳 26 坂本寺跡 27 順成遺跡 28 陶邑窯跡群 29 池田寺遺跡 30 池田寺跡 31 和泉丘陵A105地点遺跡
 32 万町北遺跡 33 和泉向代古墳群 34 池田下遺跡 35 唐国池田山古墳群 36 ウトジ池古墳群 37 陶邑窯跡群 38 和泉丘陵
 A81地点遺跡 39 和泉丘陵A1地点遺跡 40 和泉丘陵A8地点遺跡 41 観音寺山遺跡 42 寺門古墳群 43 和氣遺跡 44 摩湯
 北遺跡 45 軽部池遺跡 46 小田遺跡 47 軽部池西遺跡 48 軽部池 49 山ノ内遺跡 50 山直北遺跡 51 田治米宮内遺跡 52 摩
 湯山古墳 53 馬子塚古墳 54 イナリ古墳 55 三田古墳 56 上フジ遺跡 57 二俣池北遺跡 58 水込遺跡 59 黒石遺跡 60 山直
 中遺跡 61 芝ノ垣外遺跡 62 高月寺跡 63 吉井遺跡 64 箕土路遺跡 65 荒木土壙跡 66 栄の池遺跡 67 下池田遺跡 68 小松
 里廻寺 69 八木城跡 70 金池西遺跡 71 大路城跡 72 大町遺跡 73 今木城跡 74 田治米庵寺 75 田鶴羽遺跡 76 久米田寺跡
 77 久米田古墳群 78 久米田池 79 岡山遺跡 80 三田墓地 81 ドゾク遺跡 82 重ノ原古墳群 83 赤山古墳群 84 尾生遺跡
 85 福田城跡 86 狐塚遺跡 87 上松三味遺跡 88 上松遺跡 89 合池遺跡 90 板屋遺跡 91 上松中尾遺跡 92 唐池遺跡 93 琴山
 遺跡 94 尾崎遺跡 95 児子池東遺跡 96 荒子遺跡 97 三本松下遺跡 98 仏谷尾遺跡 99 泉光寺 100 壺山遺跡

図2 寺田遺跡と周辺の遺跡（「寺田遺跡Ⅲ」図1 転載・一部加筆）

第2節 既往の調査

府営和泉寺田住宅建て替えに伴い、工事の範囲に基いて調査区を設定し、これまでに3次にわたる発掘調査を実施してきた。第1次調査は遺跡の北東部、第2次調査は中央部の南西地区、第3次調査は中央部の北東地区にあたる(図3)。

第1次調査においては、古墳時代前期から後期の時期の、多数の竪穴住居と掘立柱建物からなる集落跡を確認した。また、集落域を画すると考えられる大規模な河川跡を検出した。主に河川からは、鍛冶関連遺物、滑石製玉類、製塩土器、朝鮮半島系土器をはじめ、須恵器・土師器など、5世紀後半を中心とする時期の遺物が大量に出土した。

次いで、第2次調査では、良好な状態の弥生時代中期後半の竪穴住居を含む弥生時代中期から後期にかけての集落跡、および庄内式併行期から古墳時代前期にかけての集落跡を検出した。また、第2次調査では、弥生土器や石器などの弥生時代の遺物が多く出土した。第1次および第2次調査によって、弥生時代中期から古墳時代後期にかけての生活域の変遷が明らかになった。これらの生活域の変遷は、河川氾濫による地形変化に起因するものと推定される。

第3次調査においては、第1次調査で確認した古墳時代の集落の南西への広がりを示すように、多数の竪穴住居や掘立柱建物が検出された。滑石製玉類や須恵器、土師器、弥生土器など弥生時代から古墳時代にかけての遺物が大量に出土した。さらに、弥生時代後期以降の河川活動が明らかとなった。第1・2次調査で確認した寺田遺跡における時期ごとの景観がより鮮明になった。

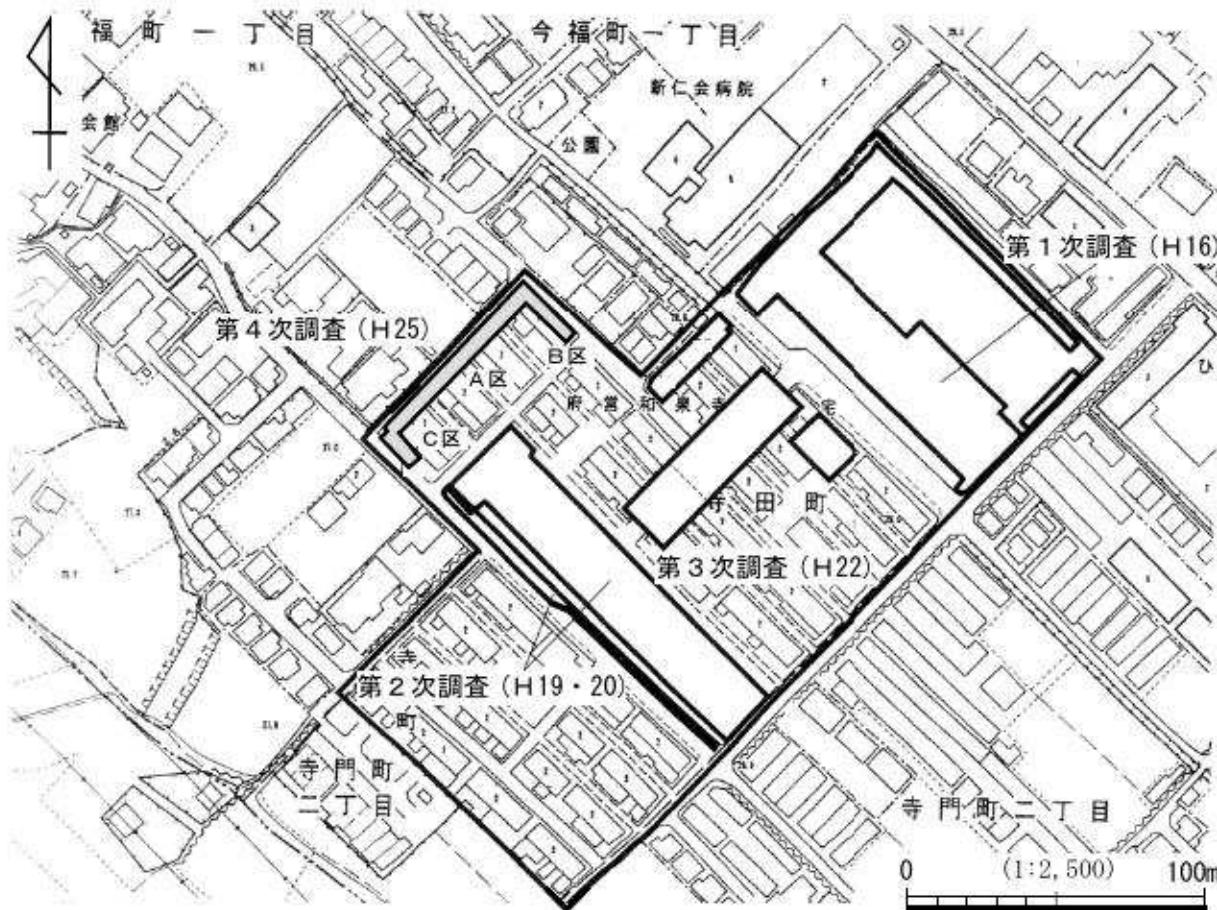


図3 今回の調査区と既往の調査(『寺田遺跡Ⅲ』図2 転載・一部加筆)

第3章 調査成果

第1節 層序

寺田遺跡は松尾川右岸の低位段丘上に位置する。遺跡の地表面は、東から西に向けて傾斜している。第1次調査区の東端部では、T.P. + 28.7 mを測る。今回の調査区の地表面においても、A区北東部・B区でT.P. + 27.4 m、A区南西部・C区でT.P. + 26.9 mと、ゆるやかな傾斜が認められる。

調査区壁面の土層断面図については、便宜上、A区北東ー南西面を西壁、B区北西ー南東面を北壁、C区南東ー北西面を南壁とする。層序については、今回の調査区では、地表面下に第1～6層の堆積が認められた。そのうち、第2層を2層、第3層を5層、第5層を2層に分層した。調査区全域を第6層まで掘削した後、A区中央部で検出した034流路内の土層の堆積状況と、第6層以下の様相を確認するため、西壁沿いにサブトレンチを設定し、第7層以下、第12層まで掘削した（図4・図版1）。

第1層

現代の盛土層（旧府営住宅建設時）で、盛土の層厚は10～40cmである。

第2層

近現代の耕作土とみられる。第2-1層は暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質土に微砂が混じる。第2-2層は黄褐色（2.5Y5/3）粘質土に微砂が混じる。

第3層

全域にほぼ水平に堆積する。第3-1層は褐色（10YR4/4）粘質土に細砂が混じる。第3-2層は暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質土に細砂が混じる。第3-3層は黄褐色（2.5Y5/3）粘質土に細砂が混じる。鉄分が多く沈着している。第3-4層はにぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土に細砂～粗砂が混じる。第3-5層は黄灰色（2.5Y5/1）粘土質シルトに微砂が混じる。近世から古代にかけての土層とみられるが、削平を受けたためか、近世の遺物はみられず、古墳時代後期～中世の土師器・須恵器・須恵質土器・瓦器・瓦質土器等を包含する。

第4層

褐色（10YR4/6）粘質土に微砂が混じる。全体に粘性が強い。第3層とは様相が異なる。第4層上面を第1遺構面ととらえ、古代から中世の遺構を検出した。第4層内には古式土師器が包含する。

第5層

上層の第5-1層はにぶい黄褐色（10YR4/3）に褐灰色（10YR4/1）を含む粘質土に細砂～粗砂が混じる。炭化物含む。下層の第5-2層は褐色（10YR4/4）に黒褐色（10YR3/2）を含む粘質土に微砂～細砂が混じる。第5-1層は、B区中央部に堆積が認められた。第5層上面を第2遺構面ととらえ、弥生時代後半から古墳時代前期前半の遺構を検出した。土層内には古式土師器・弥生土器を包含する。

第6層

にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土にシルト質粘土を含む。鉄分が沈着する。調査区内では、遺物の包含はみられない。

サブトレーナで確認した第7～12層は、主に粘土質シルトの堆積である。遺物は認められない。第7層はオリーブ褐色（2.5Y4/4）粘土質シルト、第8層は灰オリーブ色（5Y5/2）粘土質シルト、第9層は灰オリーブ色（5Y6/2）粘土質シルト、第10層は黄灰色（2.5Y4/1）粘質土に微砂混じり、第11層は灰色（5Y5/1）粘質土に微砂混じり、第12層はオリーブ褐色（2.5Y4/6）粘質土に微砂混じりである。

第2節 遺構と遺物

第4層上面の第1遺構面からは、001～018・020～022・024・026・027溝、019・023・025落ち込み、028・029ピットを検出した（図5・6、図版2・3）。また、第5層上面の第2遺構面からは、037土坑、032柱穴、030・031・033・035・036ピット、034流路を検出した（図8、図版4～7）。なお、遺構番号は第1遺構面から通し番号と、遺構の種類を付している。柱穴の可能性があるが、確定できないものはピット（小土坑）と表記した。

遺構内ならびに包含層から出土した遺物は、整理箱（通常コンテナー54cm×34cm×15cm）にして3箱分である。以下、第1・2遺構面検出の主な遺構と遺物、包含層出土遺物について記述する。

（1）第1遺構面検出の遺構と遺物（古代～中世）

001～016・020・021・026溝 古代から中世の耕作に伴う鋤溝に相当するものとみられる。005溝が北東～南西方向である以外は、南東～北西方向に延びる。これらの溝の検出面で残存する最大長は2.7m、最大幅は36cmである。断面は浅いU字形で、中央部の深さは6cmをはかる。埋土は、020溝が灰黄褐色（10YR4/2）粘質土に微砂混じりで、その他の溝は灰黄褐色（10YR6/2）粘質土に微砂が混じる。

001溝出土遺物 第1遺構面検出遺構から出土した遺物の中で図示可能な破片は1点である。図7-1（図版8-1）は土師器皿で、口径8.8cm、残存高1.4cmをはかる。底面は欠損しているが、ほぼ平らで、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。内外面はナデ調整とみられる。器形からみて13世紀頃の土師器皿と考えられる。

017・018・022・024・027溝 同じく耕作に伴う溝とみられる。これらの溝は南東～北西方向に並行する。018・022溝の間隔は11.2m、022・024溝の間隔は10.4m、024・027溝の間隔は32.8mである。調査区の検出面での長さは約3.2m以上で、さらに南東・北西に延びている。最大幅は022溝の85cmである。断面は浅いU字形で、中央部の深さは8cmをはかる。埋土は、同じく灰黄褐色（10YR6/2）粘質土に微砂が混じる。

019・023・025落ち込み 調査区域で北東・南西・北西の肩部を検出し、さらに南東方向に広がる。検出面での019落ち込み南西端と023落ち込み北東端の間隔は11.5m、023落ち込み南西端と025落ち込み北東端の間隔は10.7mである。平面形は不整形である。北東～南西方向の長さは、019落ち込み4.9m、023落ち込み6.1m、025落ち込み3.7mをはかる。断面は浅い皿形で、底面は比較的平坦である。中央部の深さは019落ち込みで12cmをはかる。埋土は、オリーブ灰色（10Y4/2）粘質土に微砂混じりで、黒色（10Y2/1）の粘土を含む。019落ち込みの上面から017・018溝が掘り込まれており、これらの落ち込みは溝より前に存在したものといえる。

028・029ピット C区の第4層上面で確認したピットで、径11cm、深さ5cmのU字形の断面を呈する。

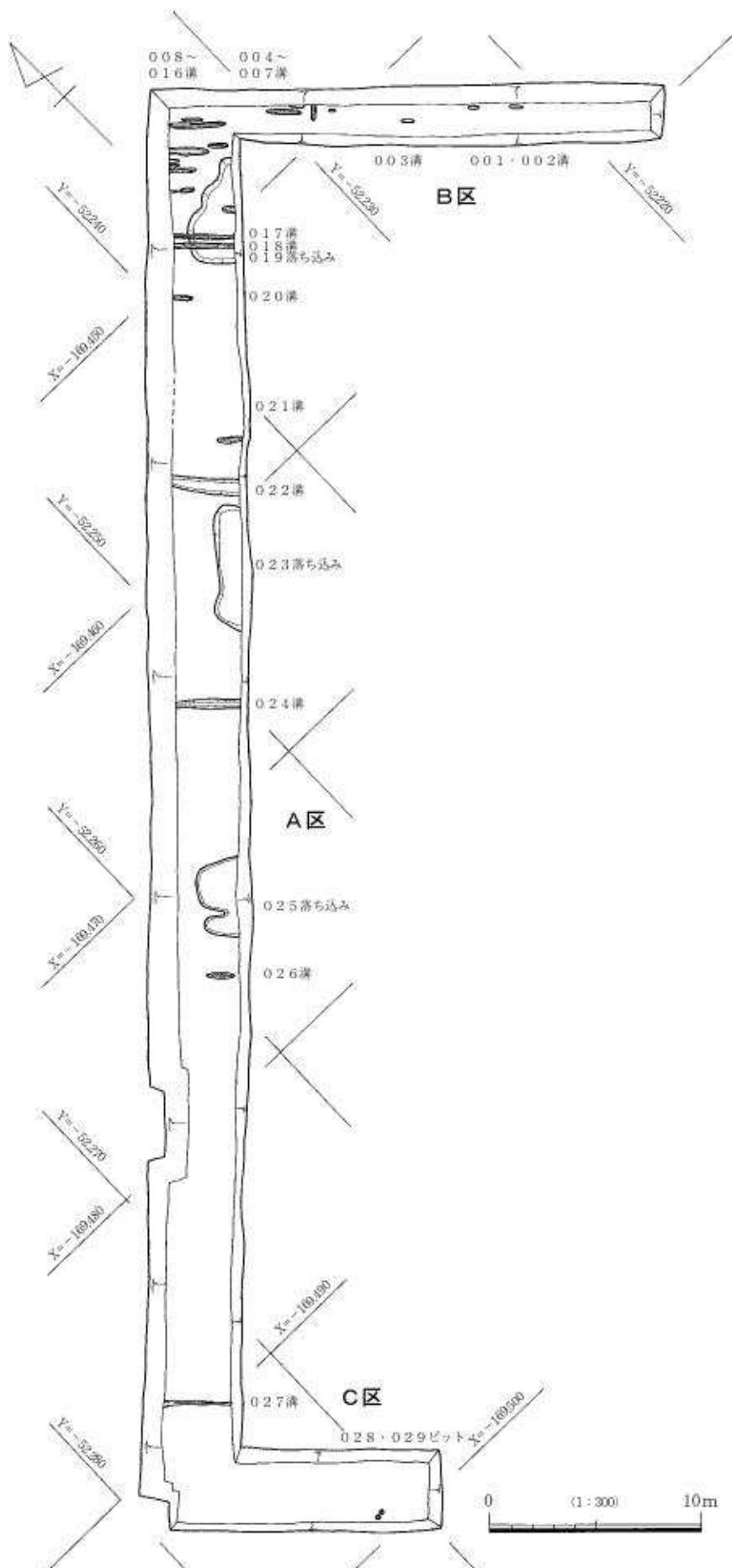


図5 第1遺構面 検出遺構 平面図

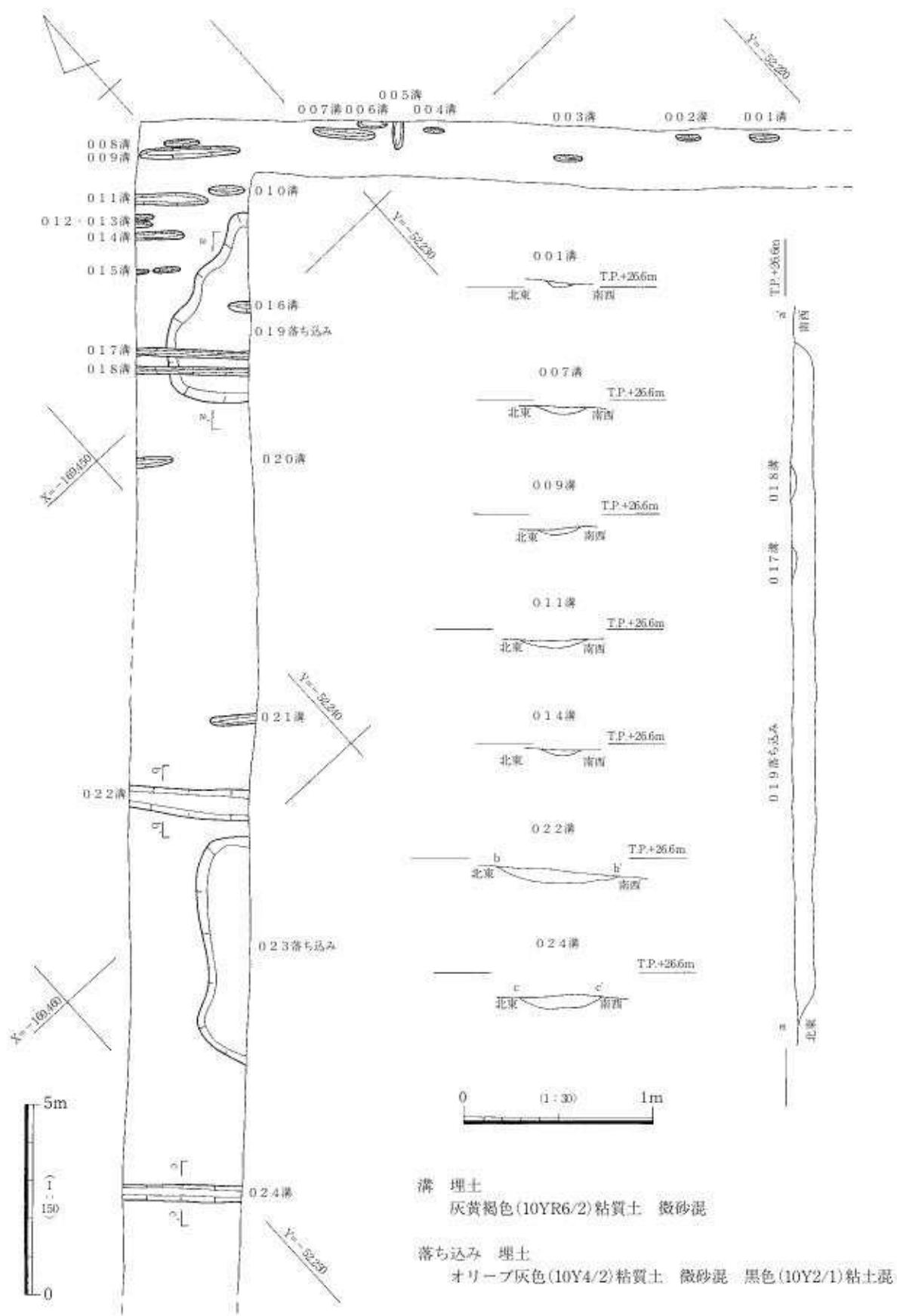


図6 第1遺構面（北半部）検出遺構 平面図・断面図

埋土は、灰黄褐色（10YR 6 / 2）粘質土に微砂が混じる。耕作に伴う杭穴の可能性が考えられる。

（2）第3層出土遺物

第1遺構面上層の第3層からは、須恵器・土師器・瓦器が出土した（図7、図版8）。図7-2は土師器皿で、口径9.4cm、残存高1.2cmをはかる。底面は欠損しているが、ほぼ平らで内湾気味に外上方に大きく開き、口縁端部は丸くおさまる。内外面はナデで調整する。3は瓦器皿で、口径10.2cm、残存高2.3cmをはかる。丸味のある底部から内湾して外上方に立ち上がる。器壁は薄い。外面にはナデ調整が残る。4～13・図版8-①は瓦器椀とみられる。4は口径15.0cm、残存高4.2cmをはかる。体部はやや内湾気味に外上方に立ち上がる。内外面に横方向のミガキを施す。外面にはユビオサエ痕が残る。和泉型Ⅲ期、13世紀前半頃と考えられる。5は口径14.8cm、残存高2.7cm、6は口径14.0cm、残存高2.9cmで、体部は外上方に大きく開き、口縁部は丸くおさまる。外面にはユビオサエ痕が残る。5の内面は横方向のミガキで調整している。和泉型Ⅲ期、13世紀と考えられる。7～13・①は高台をもつ瓦器椀底部である。7は高台径5.6cm、8は6.0cm、9は5.3cmで、外下方に広がる高台をもつ。10は高台径4.6cmで、断面方形の高台を下方向に貼り付ける。内底面にミガキが残る。11は高台径6.2cm、12は5.6cmをはかり、①を含めた3点は、断面三角形の小型の高台をもつ。13は高台径4.4cmで、新しい段階の形骸化した高台を貼り付けている。これらの高台の様相から、和泉型Ⅲ期、13世紀に属するものと考えられる。

14・15は須恵器で、14は口径13.6cm、残存高2.5cmの杯蓋、15は受部径14.4cm、残存高2.7cmの杯身である。内外面は回転ナデで調整する。TK43型式に属するとみられ、6世紀後半の年代が考えられる。16は須恵質の鉢で、口径32.0cmを測る。内外面を回転ナデで調整している。

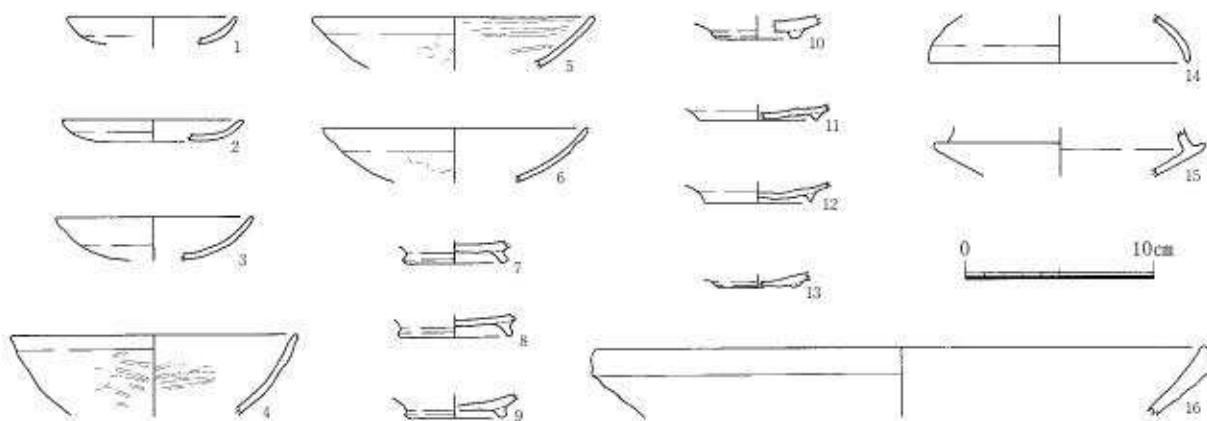


図7 出土遺物実測図（1）

（3）第2遺構面検出の遺構と遺物（弥生時代後期後半～古墳時代前期前半）

037土坑 B区中央部北西寄りで検出した土坑である。上面の平面形は、南東-北西ライン南西側で2.16m、北東側で1.05mとだいに細くなる。北東-南西ラインは調査区の幅1.23m以上である。不定形な楕円形とみられる。土坑中央部は深さ81cm、北東壁部は深さ27cmをはかる。断面は段状のすり鉢形である（図10）。

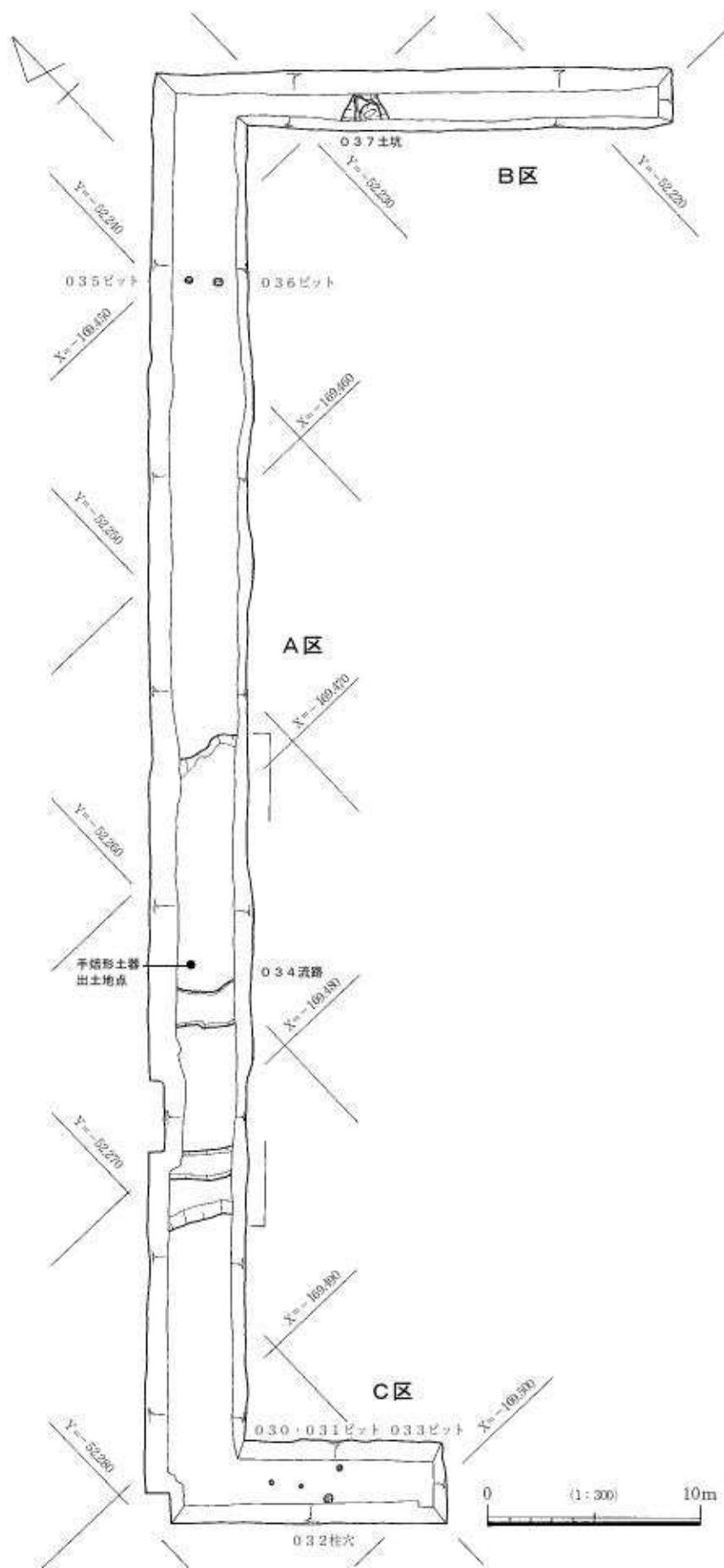


図8 第2遺構面 検出遺構 平面図

埋土は、上層が黄灰色（2.5Y5/1）にオリーブ褐色（2.5Y4/4）を含む粘質土に細砂～粗砂が混じる。中心部には黄灰色（2.5Y4/1）にオリーブ褐色（2.5Y4/4）を含む細砂混じりの粘質土が厚く堆積する。この土層から完形にちかい古式土師器が出土した（図9・10、図版7）。底部付近には炭状の炭化物の堆積がみられた。最下層は灰色（5Y5/1）シルトで、一部、土師器や炭化物が含まれていた。土坑内周縁部は褐灰色（10YR4/1）にオリーブ褐色（2.5Y4/4）を含む粘質土に細砂～粗砂が混じり、炭化物の堆積もみられる。037土坑は、炭化物や土師器細片を多く含む第5－1層下層の第5－2層からの掘り込みであるため、この土坑を中心とする一帯が広範囲の落ち込み状堆積であった可能性も考えられる。

037土坑出土遺物 037土坑から古式土師器が出土した（図13-18～26、原色図版・図版9・10・11）。図13-18～20・図版11-②は小型丸底壺である。18は口径11.5cm、器高6.5cm、19は口径10.4cm、器高7.3cm、20は口径11.6cmをはかる。体部は内湾しながら外下方にのび、口縁部はまっすぐに外上方に開く。端部は丸くおさめる。18は体部内外面をヘラミガキ、口縁部を横方向の板ナデの上にヘラミガキで調整する。色調は内外面ともに灰白色（2.5Y8/1）を呈する。19は内外面をヘラミガキで調整する。色調は外面がにぶい橙色（7.5YR7/3）、内面は灰白色（10YR8/1）、褐灰色（7.5YR4/1）を呈する。底部外面と内面の一部に薄くススが付着している。20の調整は磨滅のため不明確だが、内面にヨコナデが残る。色調は外面が橙色（2.5YR6/6）、内面は淡橙色（5YR8/3）を呈する。②は内外面をヘラミガキで調整する。色調は内外面とも灰白色（10YR8/2）を呈する。21は複合口縁壺で、口径20.0cmをはかる。口縁部外面に竹管文を付した円形浮文を貼り付ける。調整は磨滅のため不明確だが、ヘラミガキとみられる。色調は内外面ともに橙色（5YR7/8）を呈する。

22～26は甕である。22・23は外上方に開く口縁部とゆるやかに内湾して外下方にのびる体部からなる。口縁端部はわずかに内面に肥厚させて丸くおさめる。22は口径15.0cm、残存高7.7cm、23は口径13.2cm、残存高7.3cmをはかる。22は口縁部外面をナナメ方向のハケの上にヨコナデ、内面を1.2cm幅の板ナデ、体部外面を7～9本/1.1cmのハケ、内面をケズリで調整する。色調は内外面ともに灰白色（2.5Y8/1）を呈する。口縁部外面には一部ススが付着する。23は口径13.2cm、残存高7.3cmをはかる。同一個体とみられる体部片が多く出土した。調整は磨滅しており不明確だが、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は10本/1cmのナナメハケとみられる。色調は内外面ともににぶい橙色（5YR7/4）を呈する。体部下半部外面にススが付着する。24は口径11.8cm、25が13.6cm、26が13.8cmをはかる。調整は、24が口縁部内外面にヨコナデ、25が内面に板ナデ、26は内外面にヨコナデを施す。色調は、24が外面は黒色（N2/）、内面は灰白色（2.5Y8/1）、25が外面はにぶい褐色（7.5YR6/3）、内面が褐灰色（7.5YR6/1）、26が外面はにぶい黄橙色（10YR7/2）、黒褐色（10YR3/1）、内面は灰白色（10YR7/1）を呈する。24・26の口縁部外面にススが付着する。これらの土師器は布留1式に属し、古墳時代初頭の時期が考えられる。

032柱穴 C区中央部の南西壁沿いで検出した径36cmの柱穴である。断面形は深いU字形で、深さ21cmをはかる。上面中央部に径14cmの柱痕がみられた。埋土は灰黄褐色（10YR4/2）粘質土に微砂混じりで、柱痕部は黒褐色（10YR3/2）を呈した細砂混じりの粘質土である（図11、図版5）。032柱穴はC区で検出した他のピットに対し、柱穴底面がT.P.+25.92mと深いこともあり、後述するように時期的に古い可能性がある。第2次調査で確認された建物との関連が考えられる。

030・031・033ピット C区中央部の032柱穴周辺で検出した。030は径23cm、031は径18cm、033は径

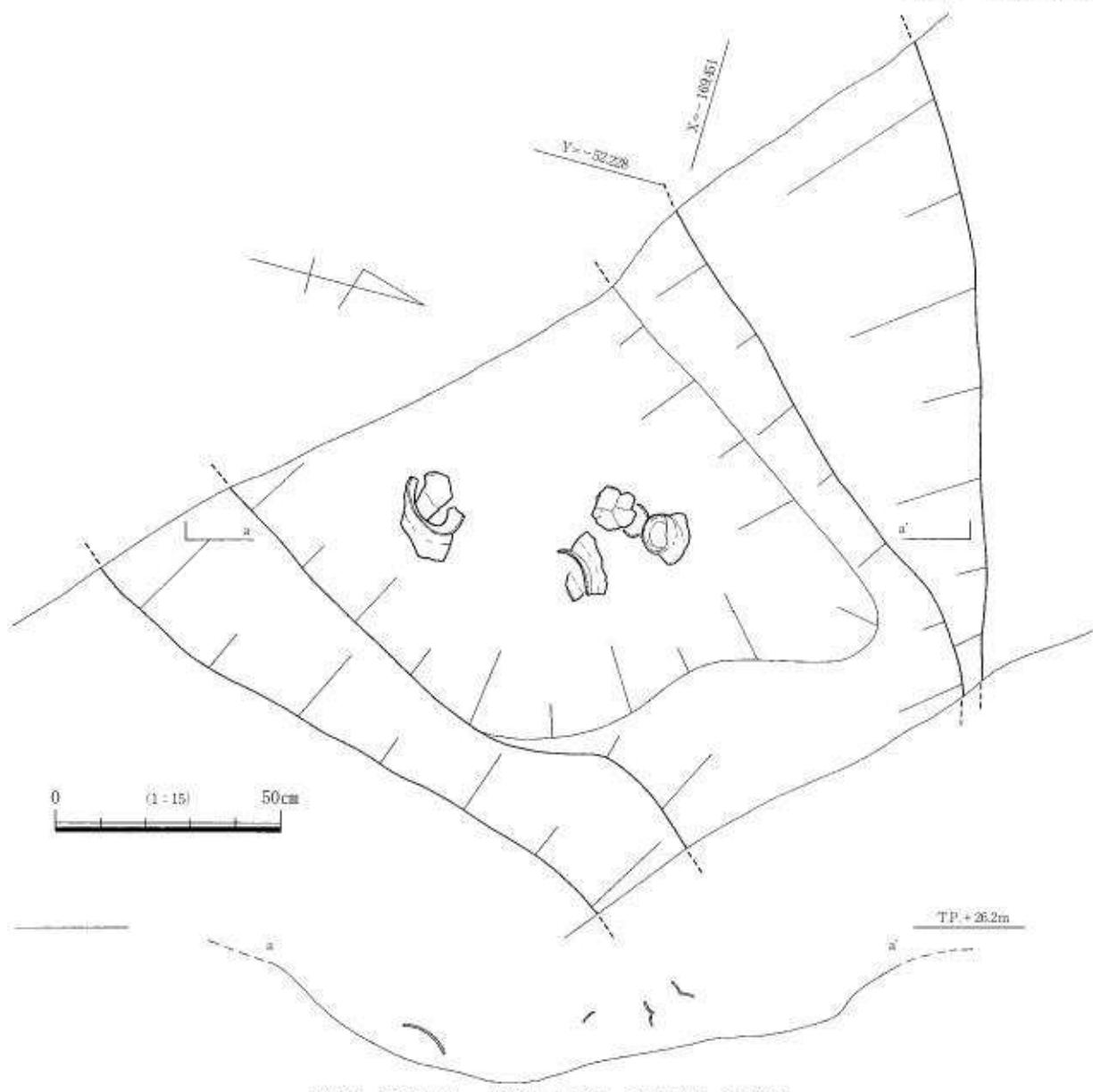


図9 037土坑 土器出土状況 平面図・断面図

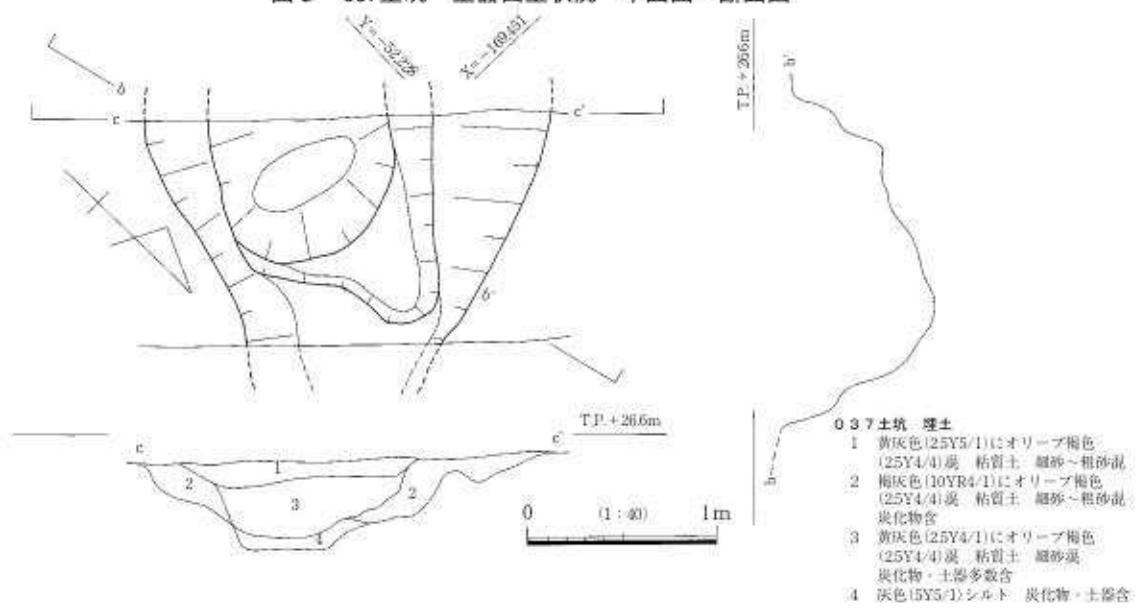


図10 037土坑 平面図・断面図

22cmを測る。検出面からは深さ5cm残存し、ピット底面はおよそT.P.+25.1mである。断面形はU字形を呈する。第5層上面で明確に検出したが、掘り込み面は第4層とみられ、第2遺構面の遺構より時期的に新しいものといえる。埋土は灰黄褐色(10YR5/2)細砂が混じりの粘質土である(図11、図版4)。

035・036ピット A区北東部で北西—南東方向に1.37mの間隔で並んだ状態で検出したピットである。035ピットは径35cm、深さ16cm、036ピットは径38cm、深さ15cmをはかる。断面はともに深いU字形を呈する。埋土の上層は、褐灰色(7.5YR5/1)粘質土に細砂が混じり、下層は灰褐色(7.5YR5/2)粘質土に微砂が混じる。第5層上面で検出したもので、柱痕は残存していなかったが、この時期の柱穴である可能性が高い(図11、図版4・5)。

034流路 A区中央部南西寄りの地点で、最大幅22.4mで東から西に向けて流れていたとみられる自然流路である(図8)。流路は第5層上面から切り込まれ、流路中央部では上面幅およそ1.8m、深さ1m以上にわたり砂利の堆積したチャネルが認められた。流路の堆積状況は、上層から順にみると、①オリーブ褐色(2.5Y4/6)に灰オリーブ色(5Y5/3)を含む粘質土に微砂・シルト混じり、②灰色(7.5Y6/1)で細砂を含む砂層、③にぶい黄褐色(10YR4/3)の粘質土を巻き込んだ灰色(5Y4/1)・灰色(5Y6/1)・緑黒色(10G2/1)の小石・粗砂を含む砂利層、④灰オリーブ色(7.5Y5/2)の細砂を含む砂層、⑤灰オリーブ色(5Y5/2)のシルト、⑥灰オリーブ色(5Y5/3)の粘質土シルト、⑦オリーブ灰色(5Gy5/1)の粘質土シルトである。中央部チャネルと、流路南西部の深くえぐれた部分の両肩一帯には、⑧灰オリーブ色(5Y5/3)の粘質土を巻き込んだ灰色(7.5Y5/1)の小石・粗砂を含む砂利層が広がる。チャネル内は、⑨灰オリーブ色(5Y6/2)の粘質土を巻き込んだ暗青灰色(5BG4/1)、灰白色(7.5Y7/1)、灰オリーブ色(5Y4/2)を呈する小石・粗砂を含む砂利層が厚く堆積する。流路南西部の一段と深い流路部分は、⑩灰色(7.5Y5/1)の細砂を含んだ砂層をベースに、⑪灰色(7.5Y6/1)細砂を含む砂層や、⑫灰色(10Y5/1)

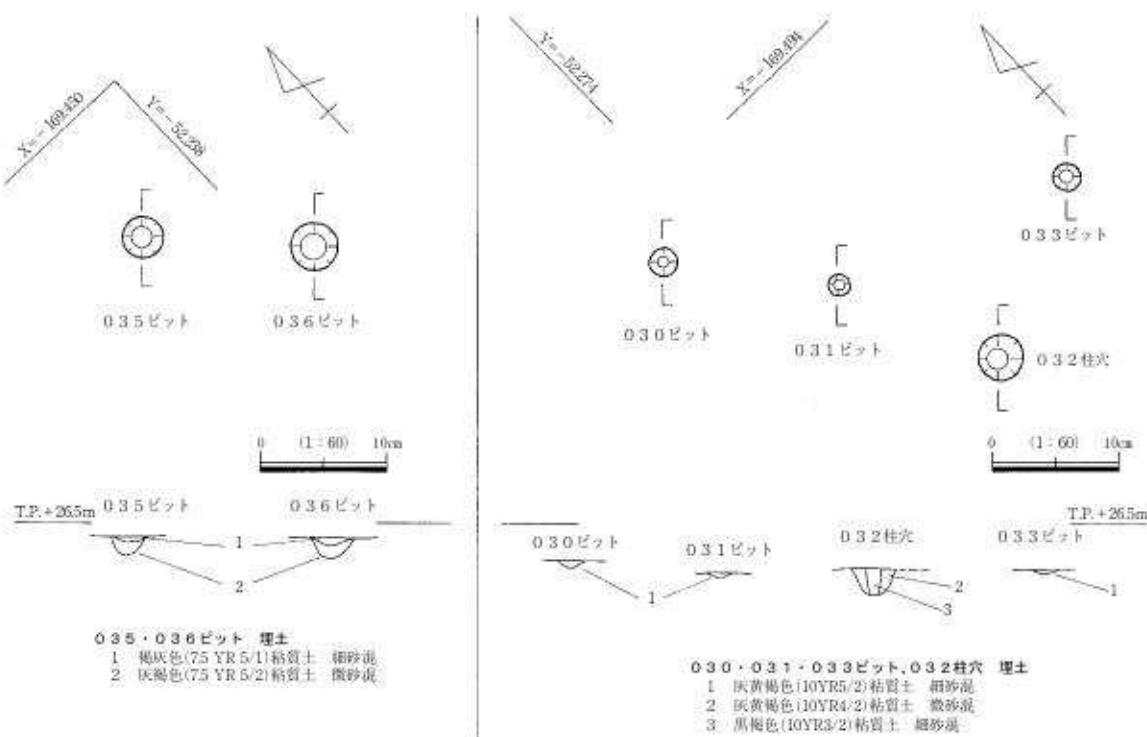


図11 032柱穴、030・031・033・035・036ピット 平面図・断面図

粘土質シルトが部分的に堆積する(図4、図版4・5)。

034流路出土遺物 034流路検出面、中央チャネル北東肩部から北東へ約1.3mの地点で、後面を下にした、完形に近い手焙形土器を検出した(図12・13、原色図版・図版6・9・10)。図13-17は手焙形土器で、鉢部底径4.0cm、復元口径15.6cm、突帶部径15.2cm、鉢部高7.9cmをはかる。鉢底部は平底で、体部は底部から内湾しながら外上方に、中位で角度を変えて内上方に延びる。この位置に表面に刻目を入れた断面三角形の突帶が巡る。鉢口縁部は外上方に開き、端部から内上方に向けて覆いを貼り付ける。前面の覆いと鉢の接合部と推定する位置に、覆いの根の形骸化とみられる粘土紐が貼り付けられている。覆いを含めた全体の復元高は14.7cmになる。覆い部外面には6本/2cm程度の右上がりの粗いタタキ、内面には幅1.2cm程度の左上がりの板ナデ、鉢部口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、内面はヨコナデで調整している。色調は外面がにぶい黄橙色(10YR6/4)、内面がにぶい黄褐色(10YR5/4)を呈する。これらの特徴から庄内式併行期頃の手焙形土器の可能性が考えられる。

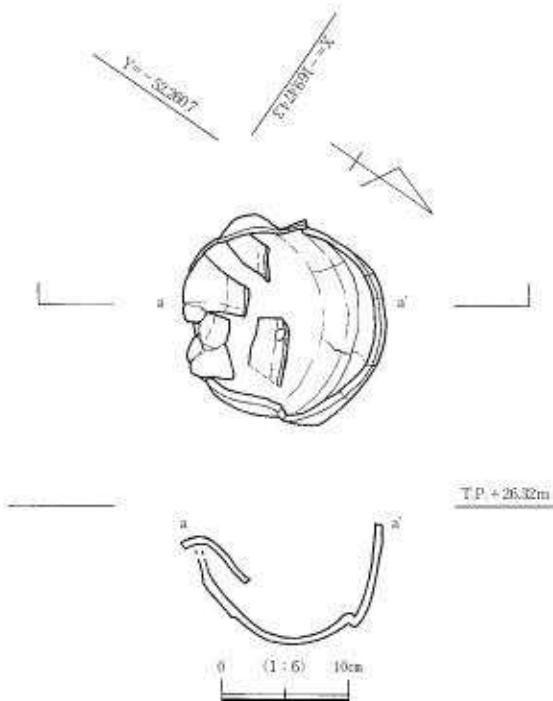


図12 手焙形土器 出土状況 平面図・断面図

(4) 第4・5層出土遺物

第1遺構面下層の第4層に6世紀の須恵器杯身片を、第2遺構面下層の第5層に弥生土器片を含む以外、第4・5層の、主としてB区から、古式土師器が出土した(図13・図版10・11)。

27・28・図版11-③は第5層で検出した。27は薄手の有段鉢である。体部から外上方に段をなして大きく開く。口径は13.6cmをはかる。内外面は磨滅している。内外面ともに橙色(5YR7/6)を呈する。布留2式に属するとみられる。28は甕である。口縁部は外上方に開き、端部はわずかに内面に肥厚させて丸くおさめる。口径は13.0cmをはかる。外面はヨコナデ、内面は幅1cm程度の板ナデで調整する。色調は外面が褐灰色(10YR5/1)、内面が褐灰色(10YR6/1)を呈する。外面にススが付着する。布留1式に属するとみられる。③は甕体部で、口縁部が欠損する。体部外面中央部は9本/1cm程度のハケ、上方から頸部にかけてはヨコナデで調整する。内面にはヘラケズリを施す。色調は外面がにぶい黄橙色(10YR7/3)、内面が褐灰色(10YR6/1)を呈する。

29~32は第4層から出土した。29は複合口縁壺で、口縁部は外湾したのち、上方に立ち上がる。口縁端部は面をなす。口径13.6cmで、器壁は6mmと厚い。内外面は磨滅している。色調は外面がにぶい橙色

(7.5YR7/3)、褐灰色 (10YR5/1)、内面は灰黄褐色 (10YR6/2) を呈する。布留2式に属するとみられる。30は小型丸底壺である。口縁部は短く、やや外上方に開き、端部は丸くおさめる。口径12.0cmをはかる。内外面は磨減している。色調は外面が淡橙色 (5YR8/3)、内面は灰白色 (5YR8/1)、灰色 (N6/) を呈する。31は甕で、口縁部は外上方に開き、端部はわずかに内面に肥厚させて丸くおさめる。口径は15.2cmをはかる。内外面は磨減している。色調は外面が灰白色 (7.5YR8/2)、灰色 (N4/)、内面はにぶい橙色 (7.5YR7/4) を呈する。30・31は布留1式に属するとみられる。

32はA区の第5層上面から出土した鉢もしくは甕の体底部である。底径は5.4cmをはかる。やや丸味をおびた底部から外上方に体部が立ち上がる。外面には4本/1cm程度の横方向のタタキが施される。色調は外面が淡黄色 (2.5Y8/3)、黄灰色 (2.5Y4/1)、内面は明褐色 (7.5YR5/6) を呈する。庄内式併行期前後の時期と考えられる。

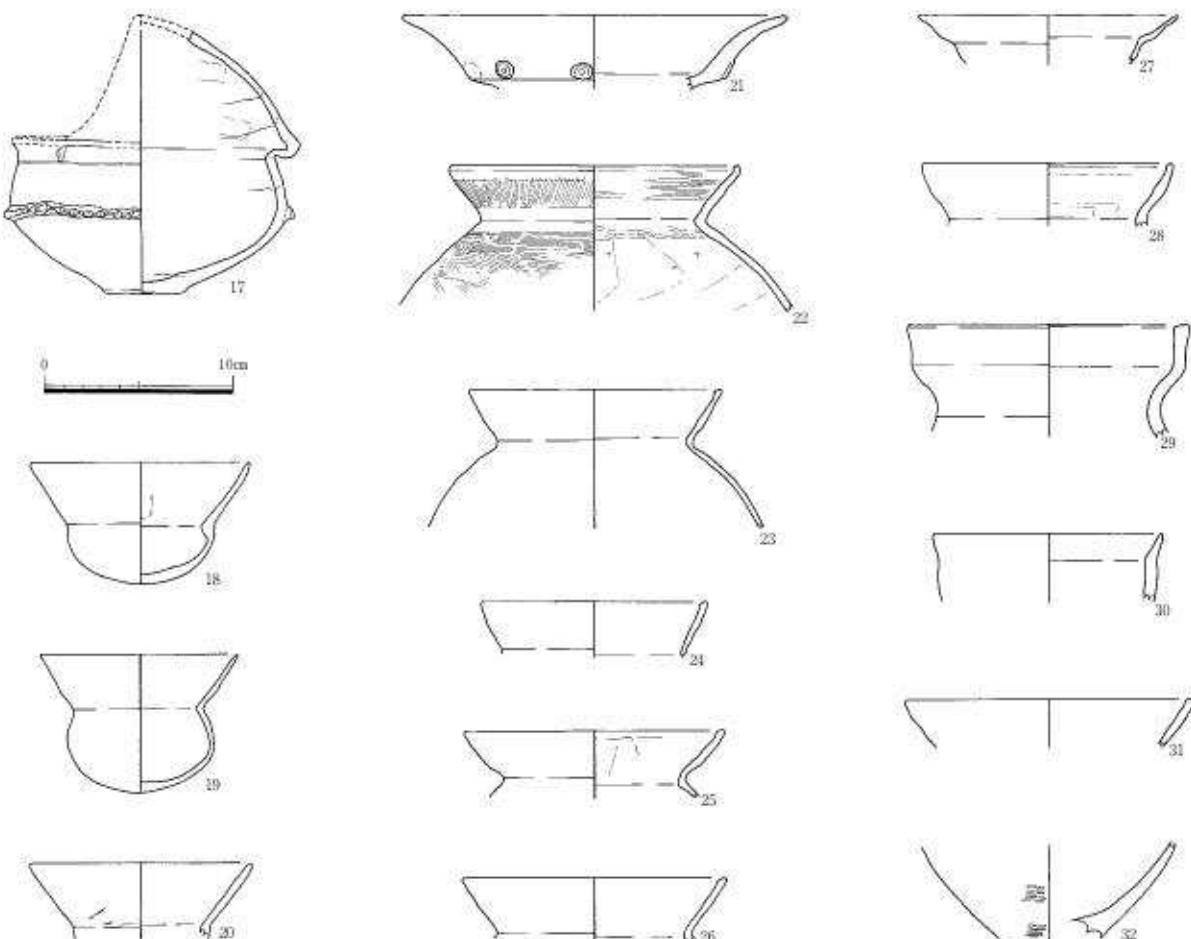


図13 出土遺物実測図 (2)

第4章 総括

第1節 第4次調査

寺田遺跡の所在する和泉市は大阪府の南西部にあたる。寺田遺跡は和泉市北西部、松尾川右岸の低位段丘上に位置する。府営和泉寺田住宅の建て替えに先立つ試掘調査において、古墳時代から中世の遺構・遺物が出土したため、新たに住宅敷地内を寺田遺跡として周知した。その後、住棟等の建て替え工事に伴い、3次にわたる発掘調査をおこなった。今回は、第4次調査として、府営住宅敷地西部の道路拡張予定地において発掘調査を実施した。

今回の発掘調査によって、古代～中世と、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の2面の遺構面から溝・土坑・柱穴・落ち込み・流路等の遺構、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器等の遺物を検出した。

(1) 古代～中世

近現代の耕作土下層の第4層（褐色（10YR4/6）粘質土微砂混）上面を精査したところ、遺構の存在が確認されたため、この面を第1遺構面とした。北西～南東方向に並行する多数の溝を検出した。これらは古代～中世の耕作に伴う鋤溝または区画溝とみられる。また、北東部には溝より遅る時期の落ち込みを検出した。

これまでの調査においても、同方向の溝が検出されている。第3次調査では溝埋土から古代の須恵器が出土しているが、今回の調査区検出の溝には古代の遺物が含まれていなかった。今回検出の溝は、ほぼ同一の埋土であることも含め、中世段階のものとみられる。この時期には、寺田遺跡一帯には、広い範囲で、条里地割に基づく耕作地が広がっていたとみられる。

(2) 弥生時代後期後半～古墳時代前期前半

第4層下面にあたる第5層上面で遺構が認められたため、この面を第2遺構面とした。調査区中央部で034流路を検出した。流路は地形に沿って、標高の高い東から西に向かって流れているとみられる。流路の方向、埋土の堆積状況、上面出土の庄内式併行期前後の土器の存在から、第3次調査で検出した414流路の西の延長と考えられる。西に延びる今回の調査区内では、流路の水深は比較的浅くなっていたとみられる。その中でも、速い流れにより大きく浸食され深くなった部分を含んでいる。

流路の中央部に存在するチャネル沿いで、流路の上面から、ほぼ完全な形を留めた手焙形土器が出土した。平底をなす底部、体部の外形、突帶の形状、覆い部外面のタタキ調整などから、庄内式併行期頃の土器とみられる。手焙形土器の用途については不明確であるが、034流路の堆積土や流路周辺部から、日常の生活を思わせる遺物が出土していないことなどから、流路近くで何らかの祭祀に用い、その後、流路に流した可能性が考えられる。

また、調査区北東部のB区で検出した037土坑からは、布留1式に含まれる甕・小型丸底壺などの古式土師器がまとまって出土した。これらの土器は土圧の影響で一部割れていたが、埋まっていた段階は完形

であったとみられる。ススなどの付着した日常の土器で、古墳時代初頭の年代が考えられる。037土坑の掘り込み面である第5—2層直上の第5—1層は、B区北壁側では、長さ12mの広い範囲に渡って広がり、古式土師器の細片を多く含んでいる。自然流路の氾濫等により、この時期の遺物が堆積したものとみられる。A区北東部で検出したこの時期の柱穴とみられるピットの存在を含め、今回の調査区の北方に古墳時代初頭を含む時期の遺構の存在を推定することができる。

調査区南西部のC区で検出した032柱穴については、第2次調査の調査区北部で確認された2棟の掘立柱建物の西延長線上に並ぶ地点に位置する。1基であるため明確ではないが、庄内式併行期から古墳時代前期の集落の広がりを示すもの可能性も考えられる。

第2節 寺田遺跡の変遷

第1～4次調査によって確認された寺田遺跡の変遷について、集落と自然流路の時期ごとの状況を中心と考えてみたい。特徴的な様相を明確にするために、弥生時代後期後半～古墳時代前期（図14）と古墳時代中期～後期（図15）の大きく2時期に分けて概観する。

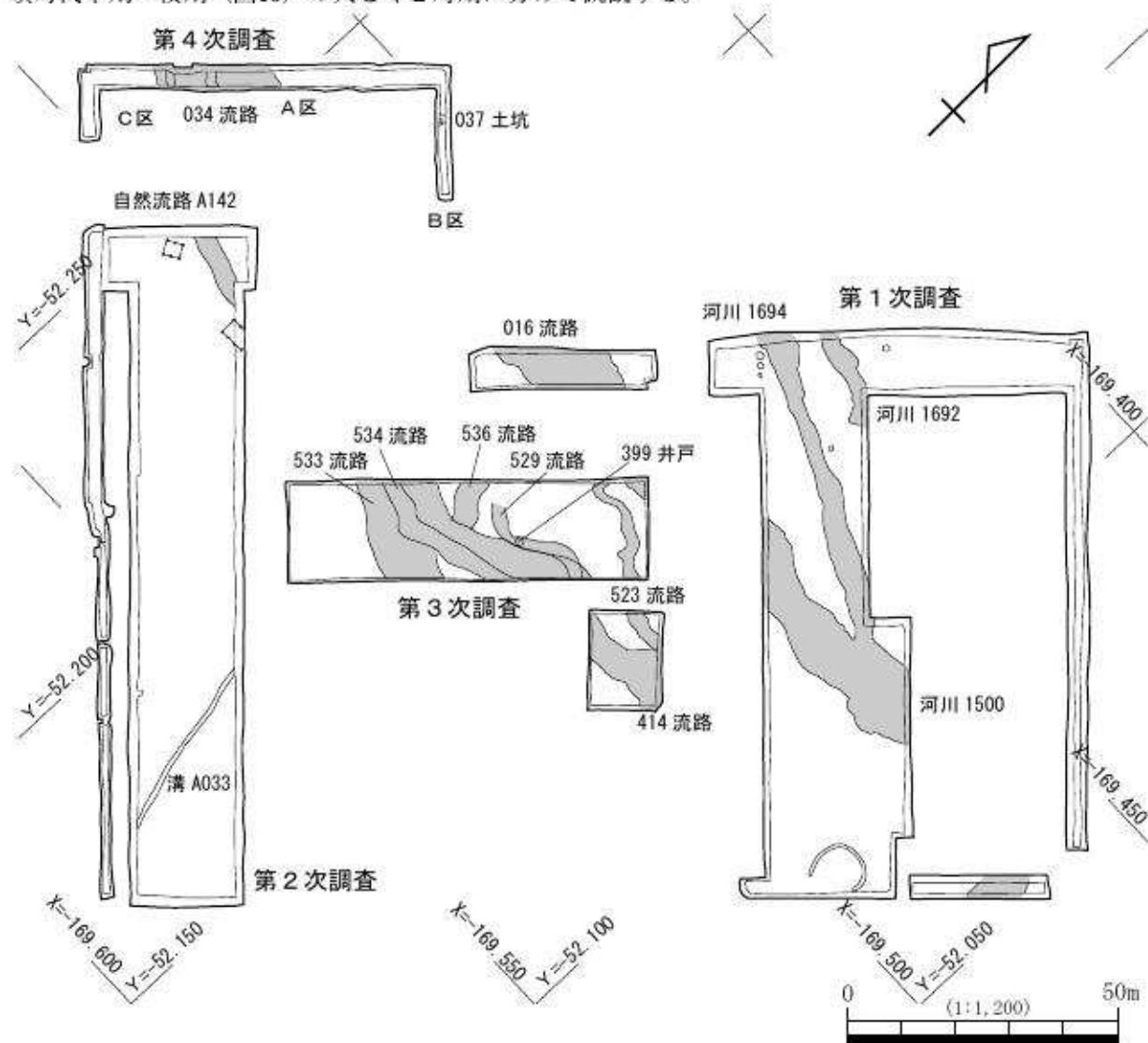


図14 寺田遺跡 検出遺構（弥生時代後期後半～古墳時代前期）

(1) 弥生時代後期後半～古墳時代前期

弥生時代中期後半には、調査区域南部にあたる第2次調査区南東部において、竪穴住居・土坑・溝などからなる集落が形成された。また、この集落域の北西部で検出した溝A 033の埋土上層からは、弥生時代後期中頃を中心とする土器が出土しており、この時期には、溝A 033はほぼ埋没状態であったとみられる。

さらに時期が新しくなると、第2次調査区北西部一帯に、弥生時代後期後半の河川氾濫による堆積層の広がりがみられる。そして、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半には、調査区域中央部を占める第3次調査区から南西部にあたる第4調査区にかけて、414流路と延長上にあたると推定される034流路が、時期によって流れの様相を変化させながら、西方向に流れていたと考えられる。

また、庄内式併行期から古墳時代前期を中心とする段階には、調査区域北東部にあたる第1次調査区南東部で、弥生時代後期かとみられる円形竪穴住居の存在が確認されている。河川1500とこれにつながる016流路の堆積土下層には、弥生土器や庄内式併行期から古墳時代初頭の古式土師器が含まれており、この段階には流路が存在したと考えられる。各時期の建物跡が密集する河川1500南側一帯には、上記の円形竪穴住居をはじめ、古墳時代前期にいたるまでの居住域が広がっていた可能性がある。

調査区域の南西部、第2次調査区北西部においても、弥生時代後期後半の洪水堆積層を基盤として、掘立柱建物や土坑からなる集落域が形成されていたが、古墳時代前期の段階で廃絶したと考えられる。この地区で北西-南東方向に延びる自然流路A 142は、弥生時代後期から古墳時代前期のもので、同じく庄内式併行期から古墳時代前期を主体とするものである。この自然流路A 142と、第4次調査区で検出した034流路は、地形的に低くなる西方向へと流れていたとみられる。地点の相違による可能性もあるが、A 142と034は流路の形状や土層の堆積状況が異なっている。

調査区域における庄内式併行期から古墳時代初頭を中心とする弥生時代後期後半～古墳時代前期の状況は、主に河川1500南側一帯と自然流路A 142一帯に集落域が形成されていたと考えられる。A 142一帯の北西部にあたり、当該時期の遺構・遺物が広がる第4次調査区は、この集落の周辺部にあたると考えられる。

(2) 古墳時代中期～後期

調査区域の中央部にあたる第1次調査区南部から第3次調査区にかけての一帯では、古墳時代中期から後期の長期にわたって、竪穴住居・掘立柱建物の多くの建物のほか、井戸・土坑・溝・流路などから構成される大規模な集落が営まれた。この集落は、調査区中央部を東から西に向かって流れる河川1500と、その延長である016流路を居住域の北限としていた。

遺跡の中心を流れる河川1500・016流路は4世紀末頃から5世紀初頭に最も水量があり、5世紀中頃には浅い窪地状をなし、5世紀後半には埋没した状態であったと推定される。住居が特に密集していた段階には、居住域を区切る境界的な意味をもつとともに、様々な不用品の廃棄および祭祀の場として利用されたとみられる。

この集落は、古墳時代中期後半に居住域の規模が最大となり、最盛期を迎えることになる。その後、古墳時代中期末になると竪穴住居はなくなり、掘立柱建物のみの集落へと移行し、古墳時代後期前半を

もって集落は廃絶すると考えられる。

集落からは最盛期である古墳時代中期を中心とした大量の遺物が出土している。須恵器・土師器の土器類のほか、滑石製臼玉や有孔円板など祭祀に用いたとみられる玉類、鉄滓・鋳造鉄斧・轆羽口など鍛冶関連遺物、韓式系土器、製塙土器、土錘、玉未製品などが検出されている。これらは、寺田遺跡の集落を営んでいた人々の特性の一端を示すものといえる。

この集落の居住域はさらに西方にも広がっていたと考えられるが、調査区域の南西部にあたる第2次調査区と第4次調査区一帯は、集落の範囲外であったとみられる。

以上のように、寺田遺跡の集落は、弥生時代中期から古墳時代後期にいたるまで、河川・自然流路の動きを中心とする自然環境の変化に対応して、時期ごとに居住域を移動しながら、断続的に集落を営んでいたものと考えられる。

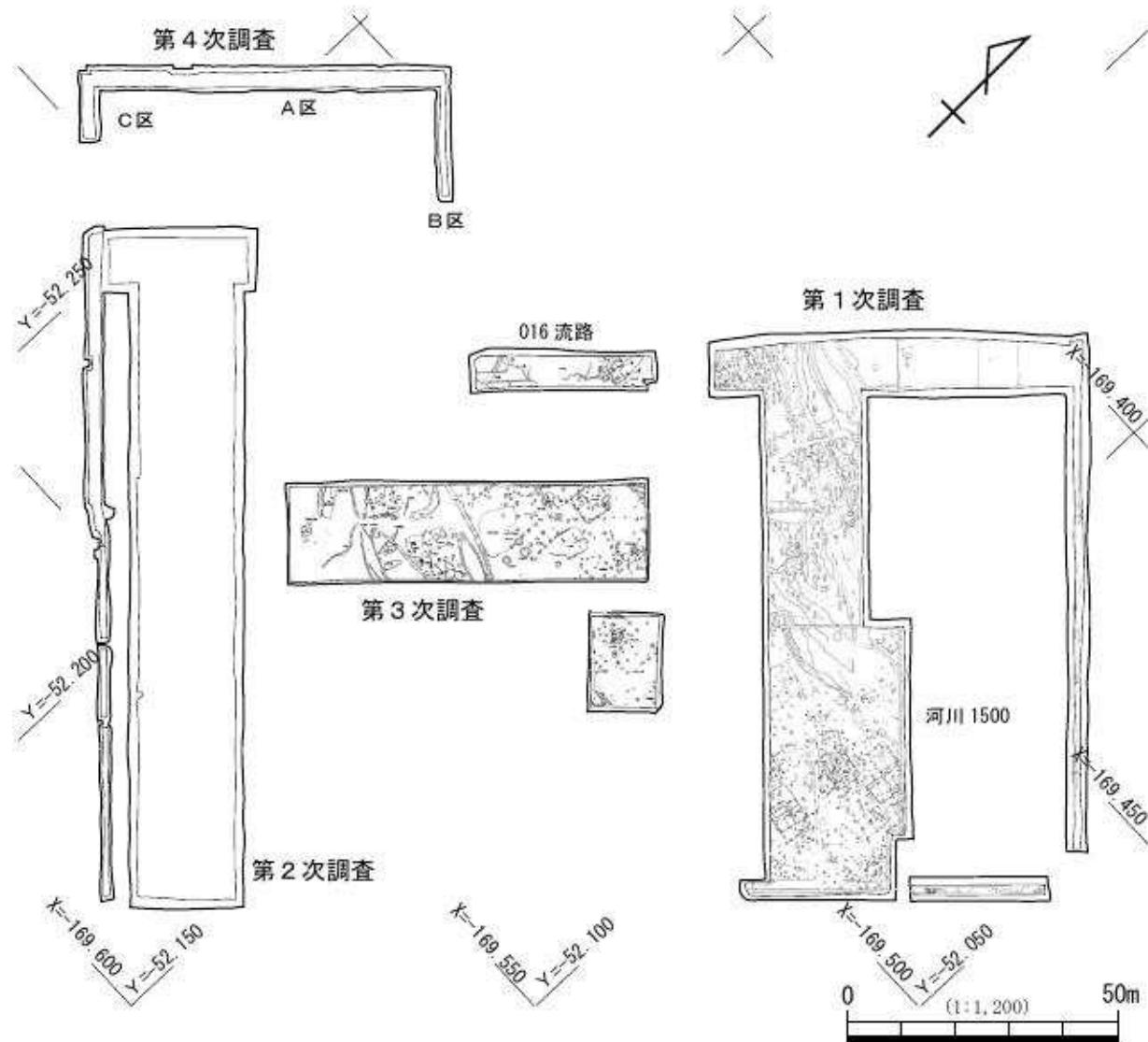


図15 寺田遺跡 検出遺構 (古墳時代中期～後期)

引用・参考文献

- ・和泉市市史編さん委員会2013『和泉市の考古・古代・中世 和泉市の歴史6 テーマ叙述編I』和泉市
- ・杉本厚典2003『河内地域』『古墳出現期の土師器と実年代』(財)大阪府文化財センター
- ・杉本清美・藤沢眞依・小山田宏一2007『寺田遺跡』大阪府教育委員会
- ・田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
- ・中世土器研究会編1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- ・土屋みづほ2010『寺田遺跡II』大阪府教育委員会
- ・寺沢薰・森井貞雄1989『河内地域』『弥生時代の様式と編年—近畿編I—』木耳社
- ・寺沢薰・森岡秀人編1989『弥生土器の様式と編年—近畿編I—』木耳社
- ・西村歩2003『古墳出現期における和泉地域の土器様相と集落の動向』『古墳出現期の土師器と実年代』(財)大阪府文化財センター
- ・西村歩・池峯龍彦2006『古式土師器編年集成 和泉地域』『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター
- ・樋口吉文1990『和泉地域』『弥生時代の様式と編年—近畿編II—』木耳社
- ・三好玄2013『寺田遺跡III』大阪府教育委員会

報 告 書 抄 錄

大阪府埋蔵文化財調査報告2014-2

寺田遺跡Ⅳ

—府営和泉寺田住宅建て替えに伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目
TEL 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成26年11月28日

印刷 有限会社 ウェイク

〒537-0001 大阪市東成区深江北2丁目11番36号

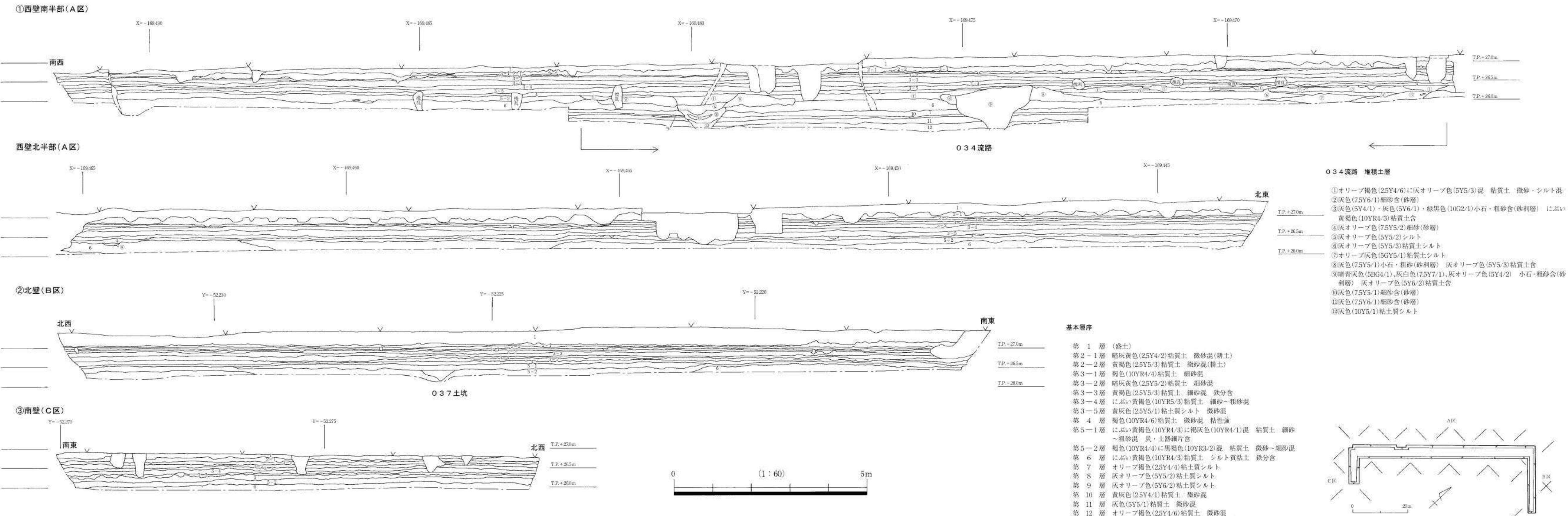
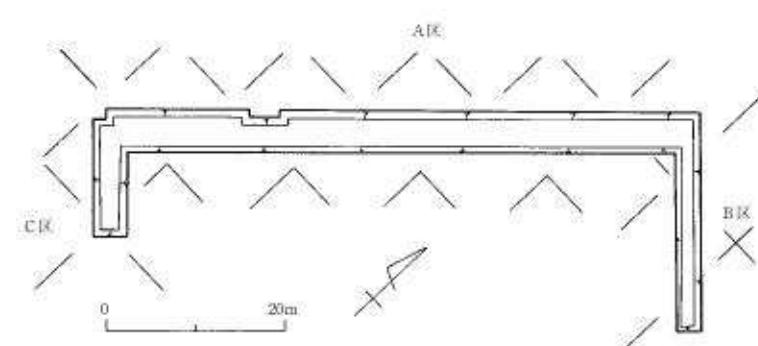
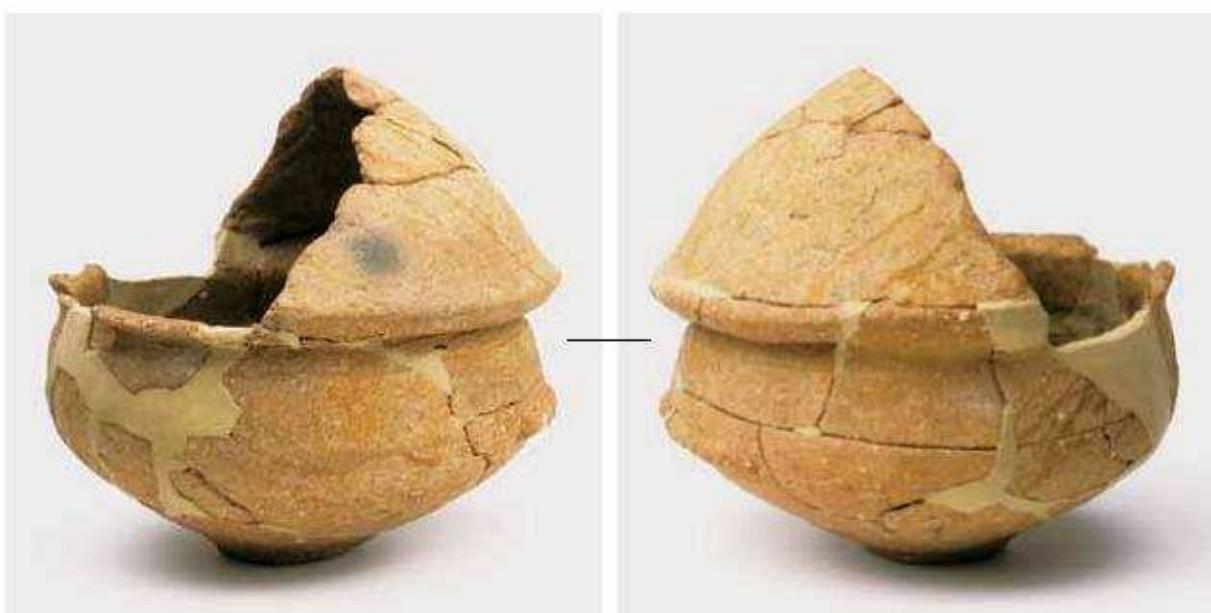


図4 調査区西壁・北壁・南壁 土層断面図



原色圖版

出土遺物

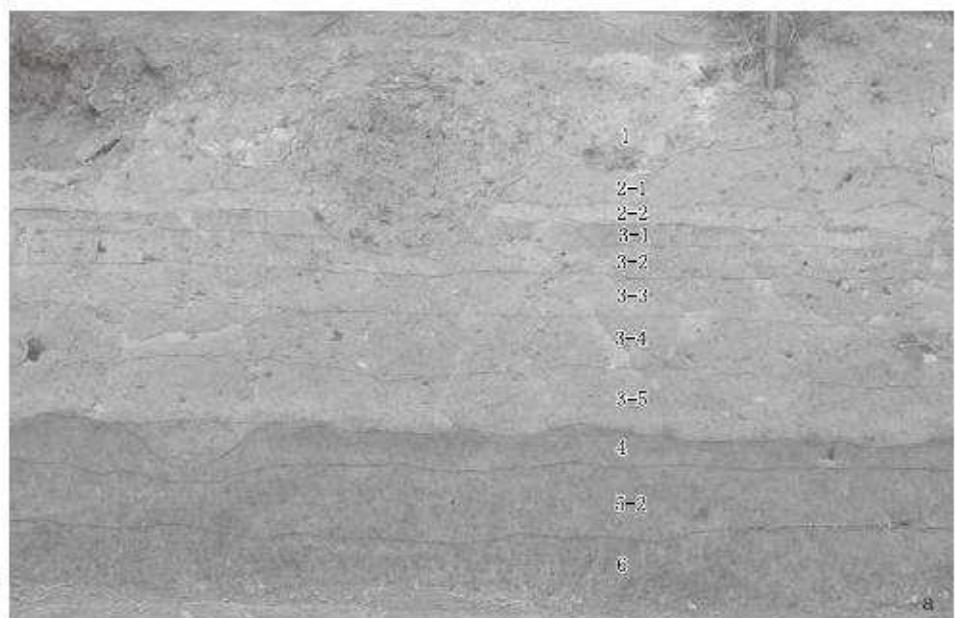


a. 034流路 出土遺物



b. 037土坑 出土遺物

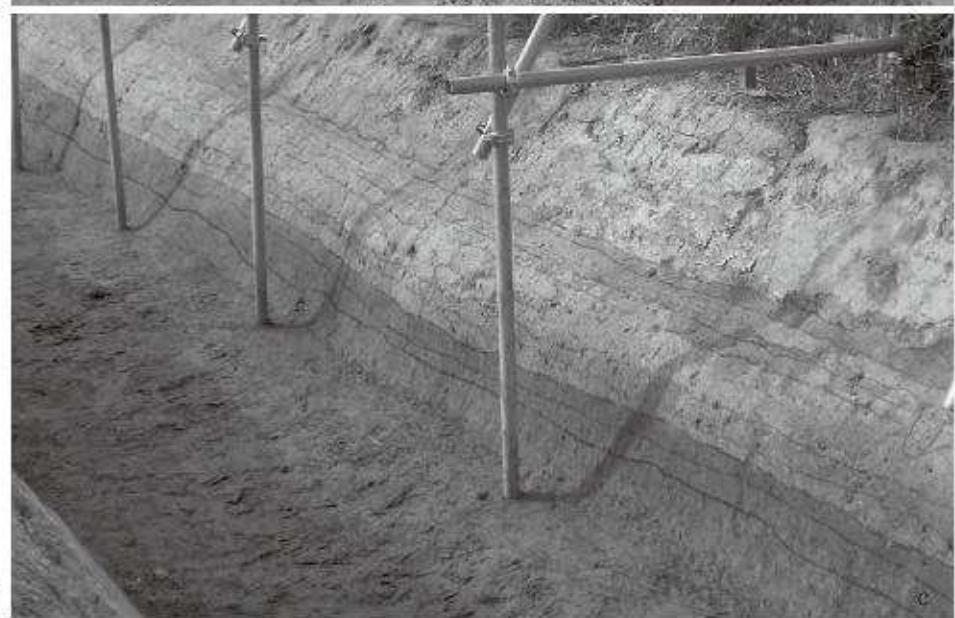
図 版



a 西壁北東部 土層断面
(南東から)

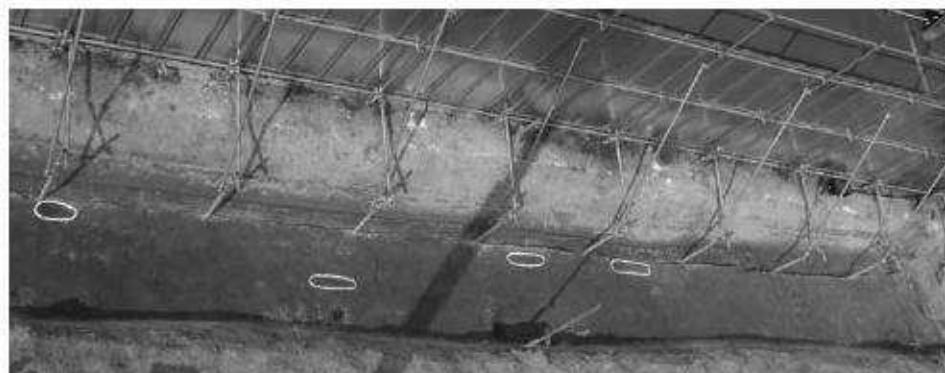


b 西壁中央部 土層断面
(東から)



c 北壁南東部 土層断面
(南から)

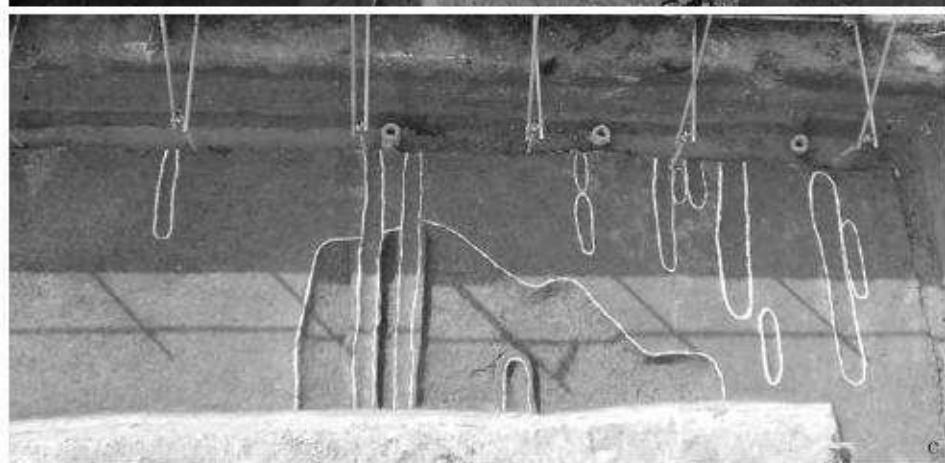
図版2 第1遺構面 検出遺構(1)



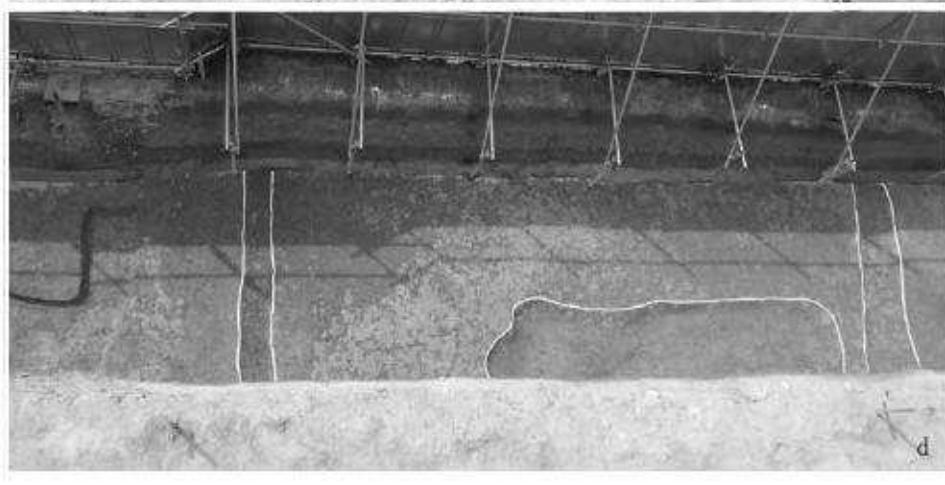
a B区 検出遺構
(西上方から)



b A・B区 検出遺構
(西上方から)

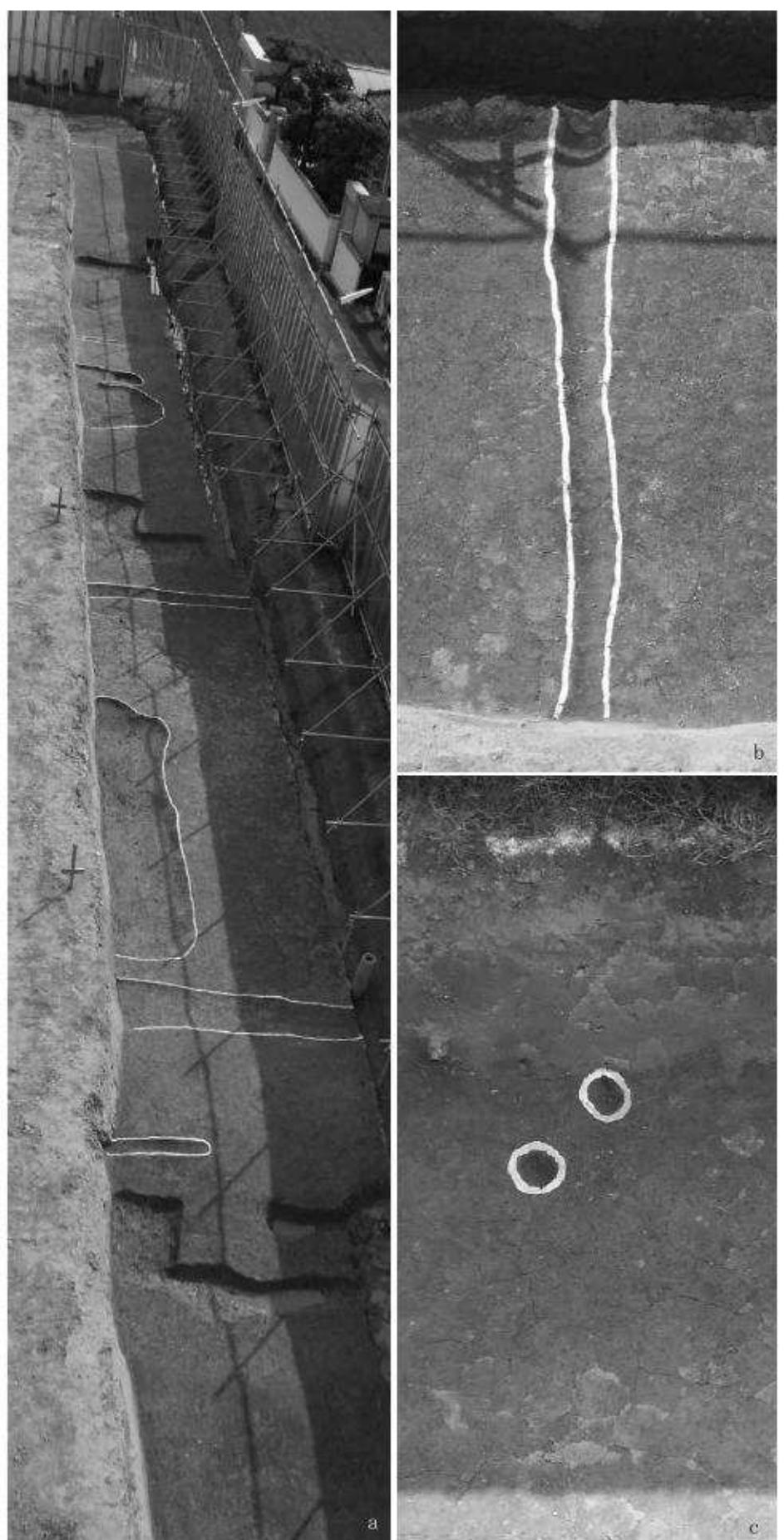


c A区北東部 検出遺構
(南東上方から)

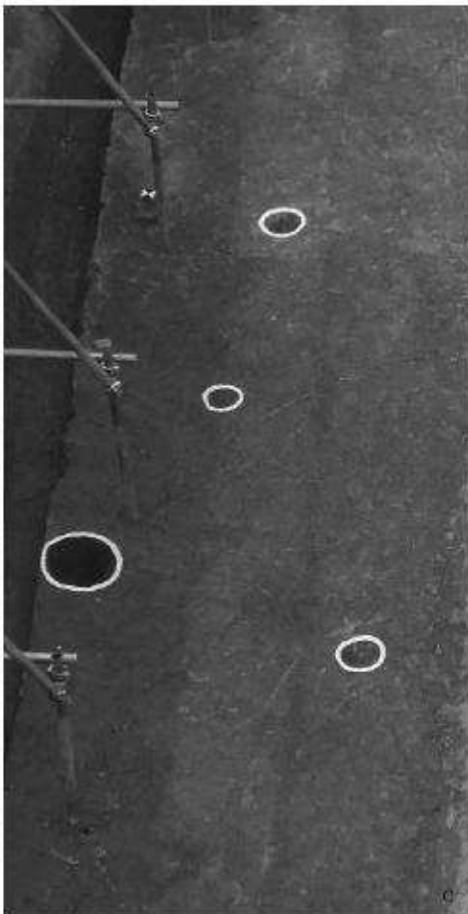
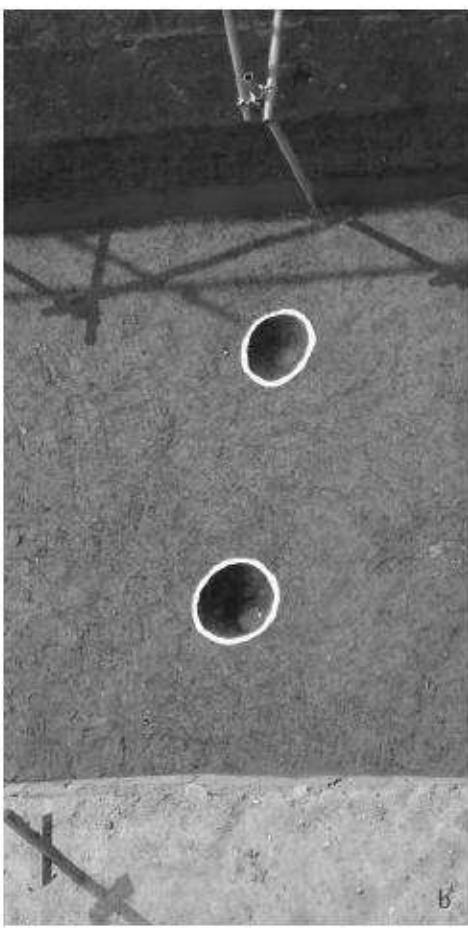


d A区中央部 検出遺構
(南東上方から)

図版 3 第1遺構面 検出遺構(2)



図版4 第2遺構面 検出遺構

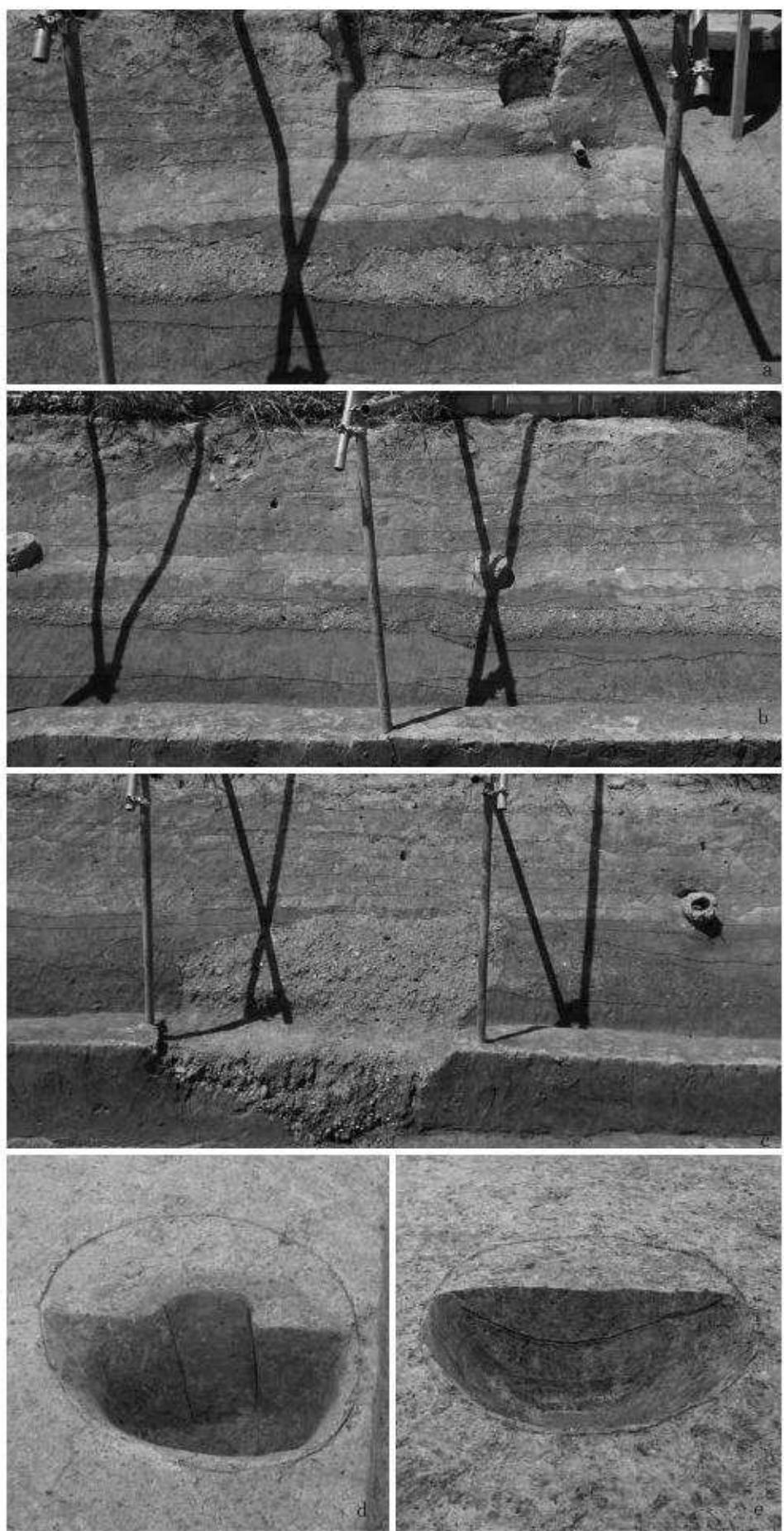


a A区 検出遺構
(南上方から)

b A区北東部 検出遺構
(南東上方から)

c C区 検出遺構
(南東上方から)

図版5 第2遺構面
遺構(1)



図版 6 第2遺構面 遺構(2)



a 034流路
手縫形土器出土状況
(南東から)



b 034流路
手縫形土器出土状況
(東から)



c 034流路
手縫形土器出土状況
(北東から)

図版 7 第2遺構面 遺構(3)

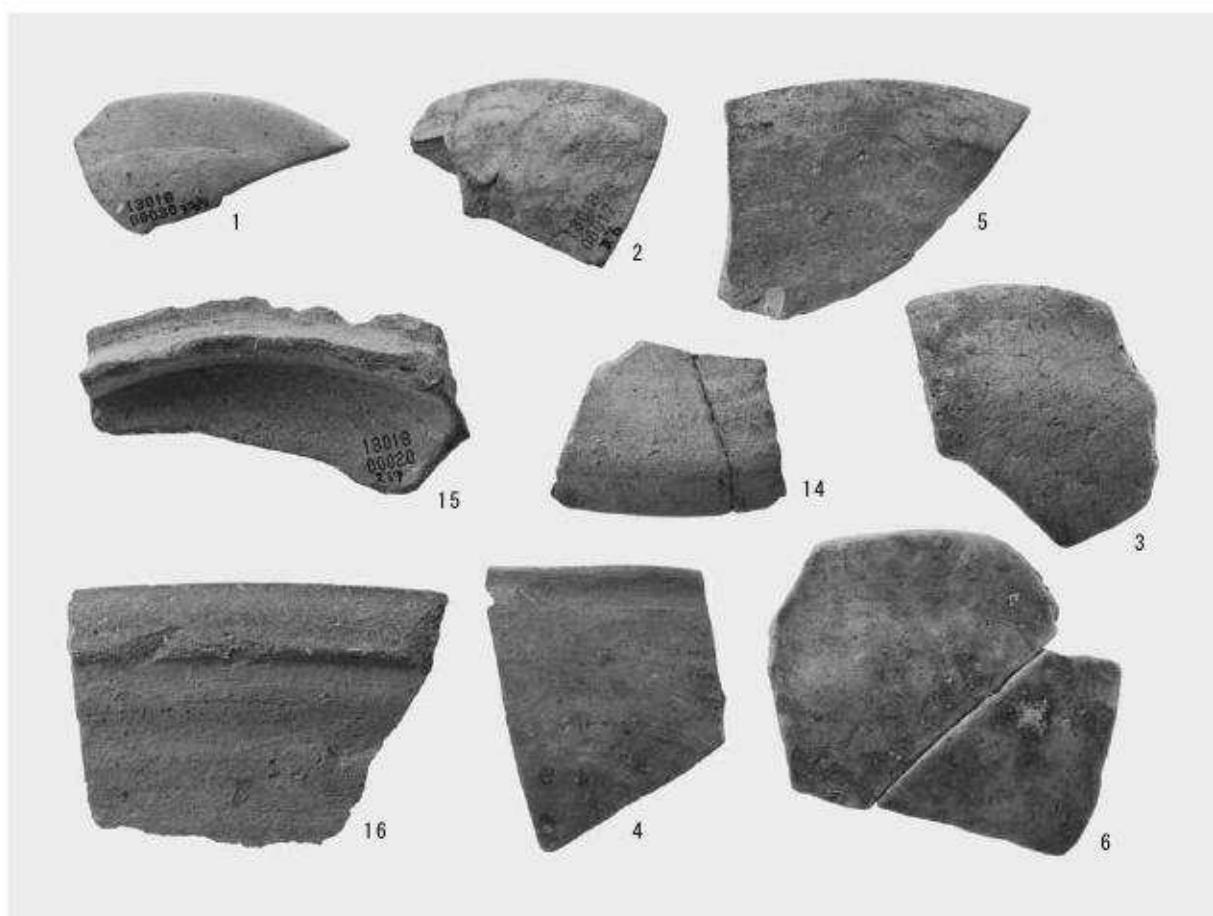


a 037土坑
土器出土状況
(北西から)

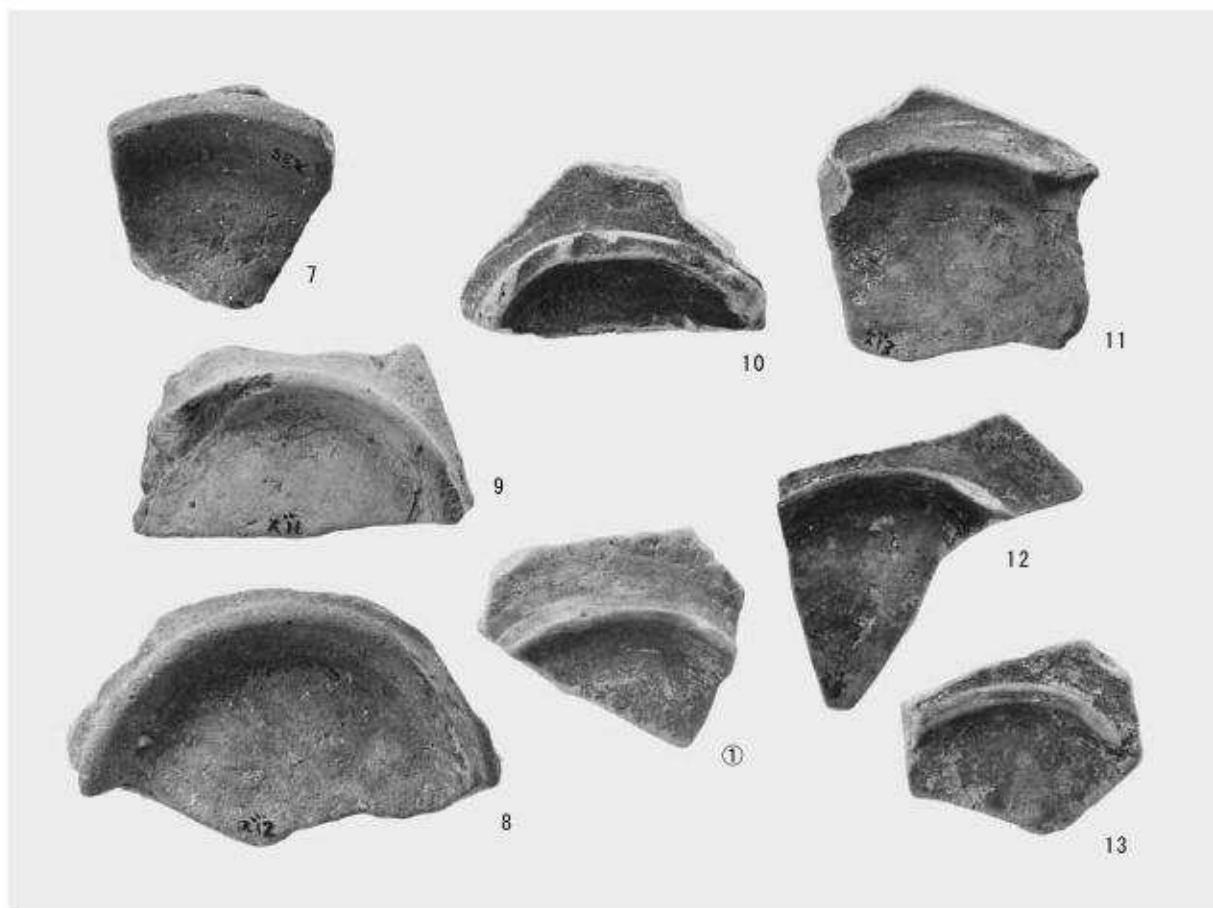
b 037土坑
土器出土状況
(南西から)

c 037土坑
土器出土状況
(北西から)

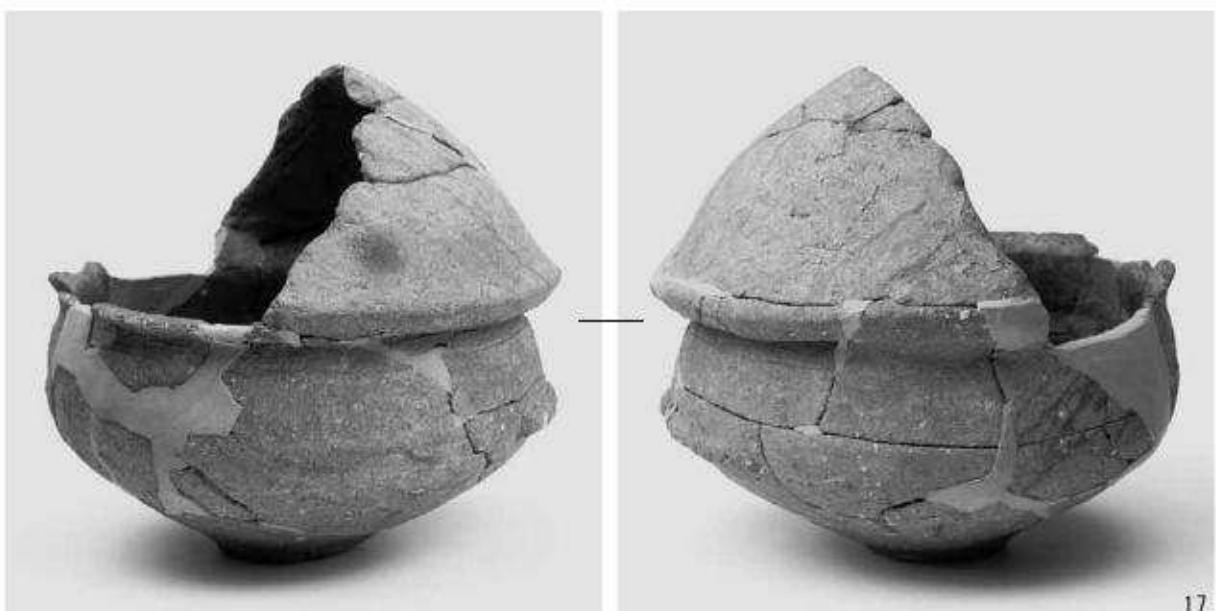
図版 8
出土遺物(1)



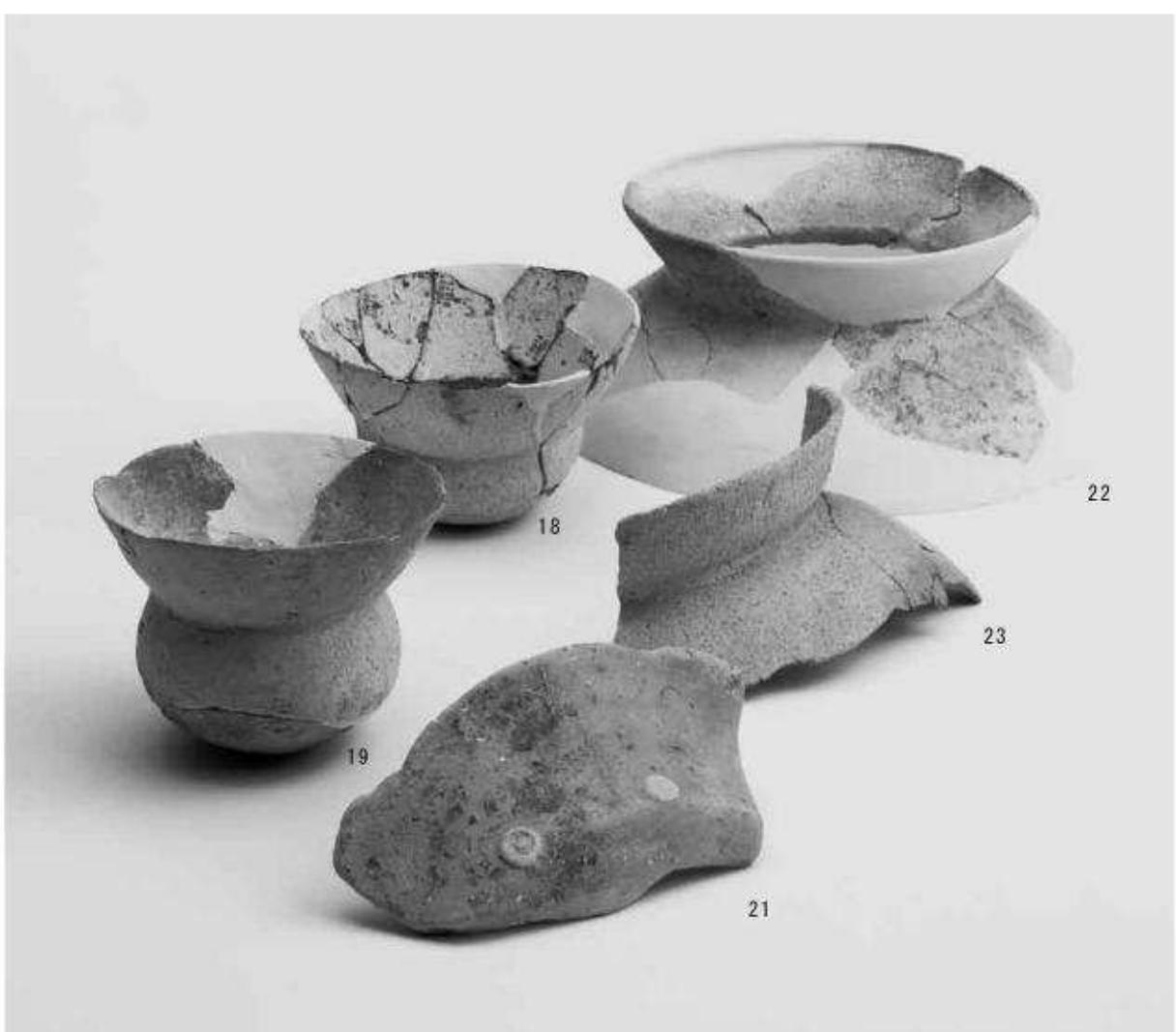
a. 001溝 (1)・第3層 (2~6・14~16) 出土遺物



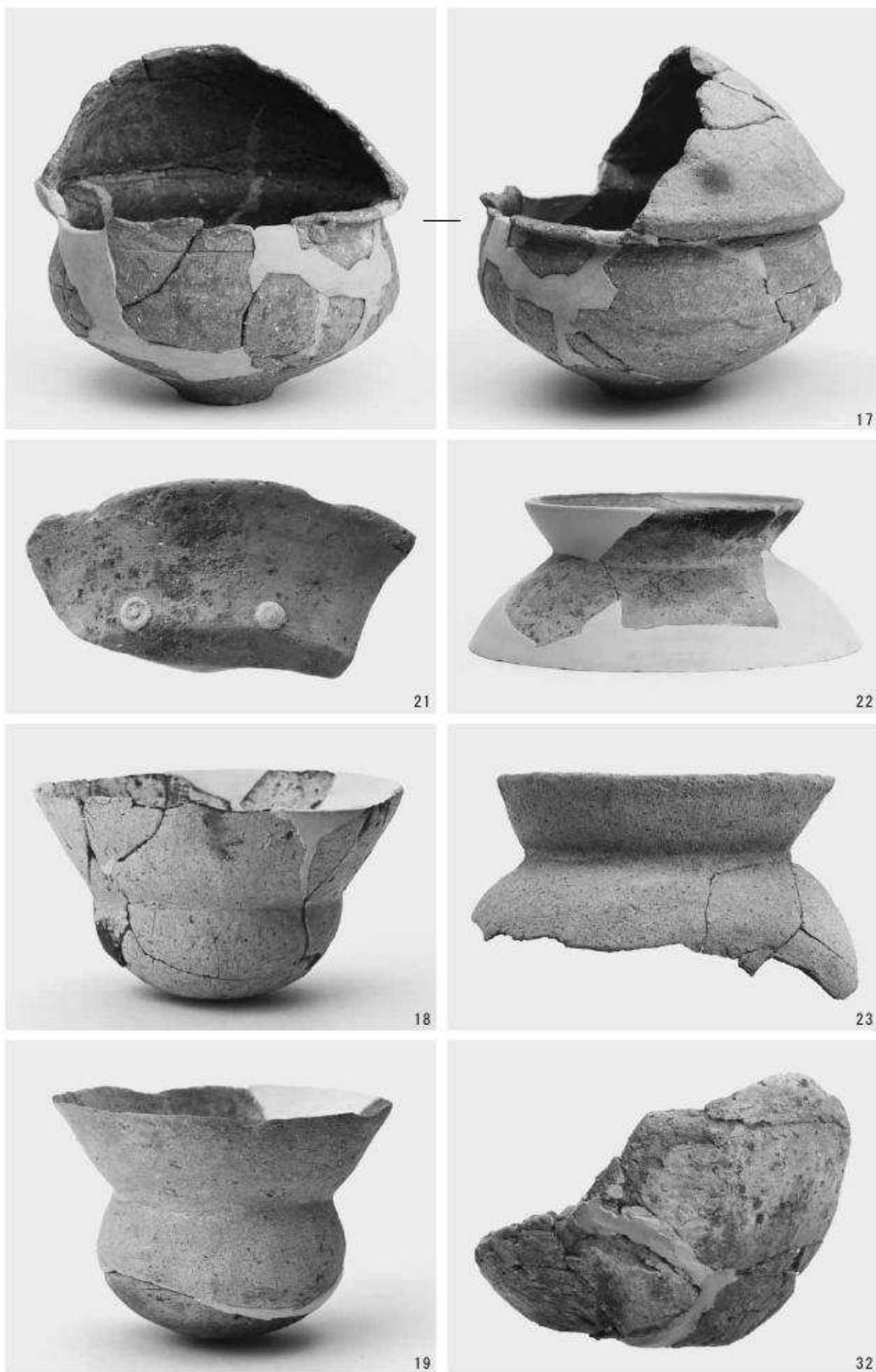
b. 第3層 出土遺物



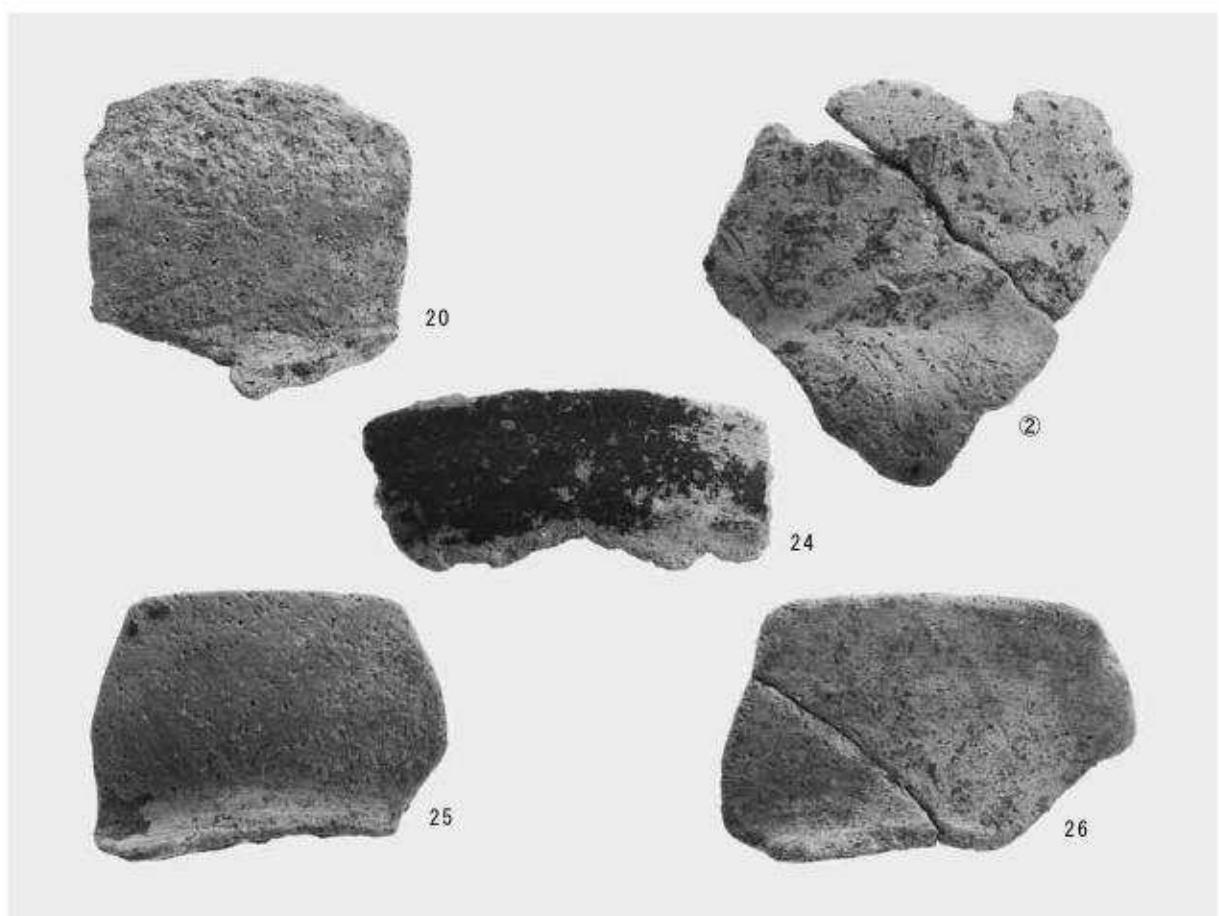
a. 034流路 出土遺物



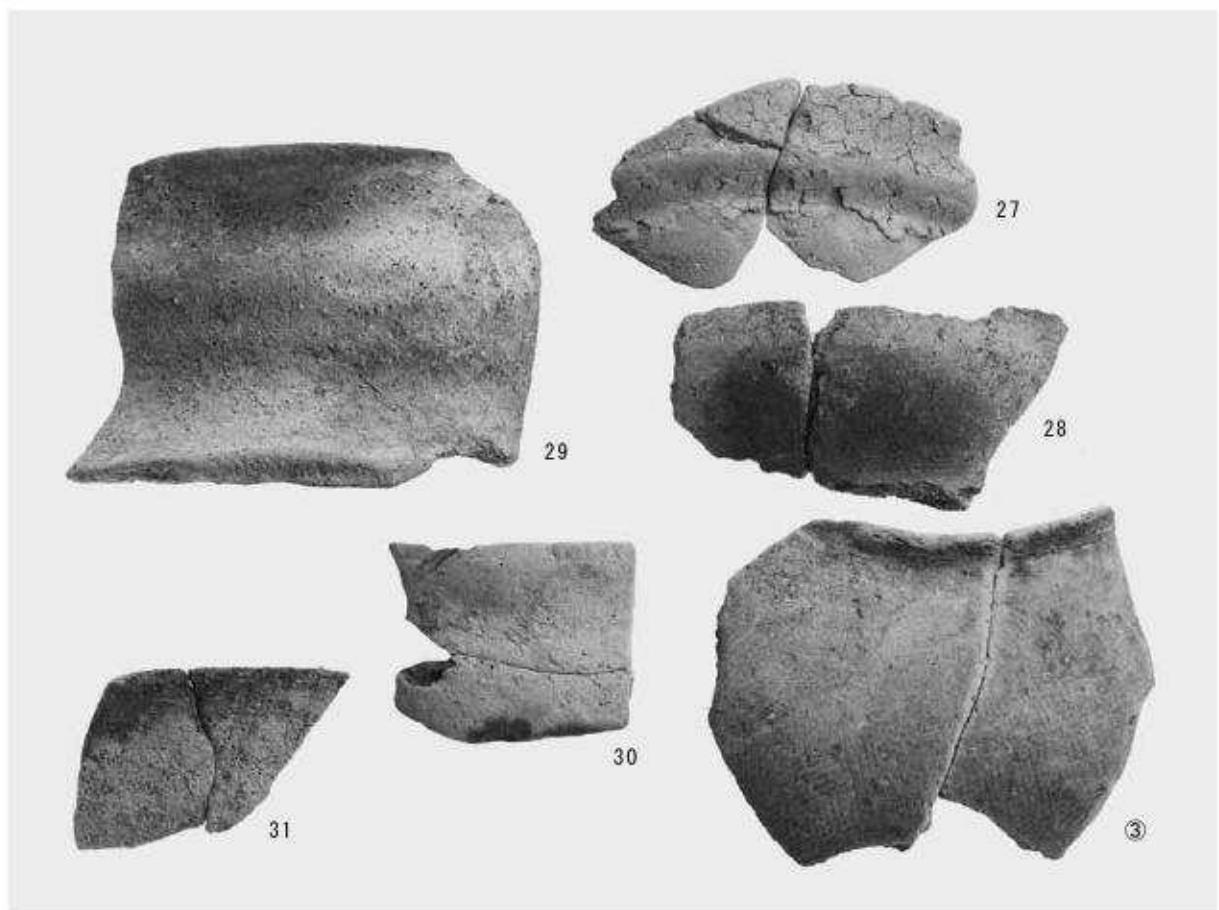
b. 037土坑 出土遺物



034流路 (17)・037土坑 (18・19・21~23)・第5層 (32) 出土遺物



a. 037土坑 出土遺物



b. 第4層(29~31)・第5層(27・28・③) 出土遺物

